

受理セサルキハ訴訟不受理ノ罪アリ尤モ事物及土地ノ管轄ニ就キ訴訟ヲ受理シ得キ丈ノ手續ヲ盡サ、ルキハ之ヲ却下シ得ルハ勿論ナリ
第四既ニ受理シタル訴訟事件ニ付キ法律ニ不明不備又ハ欠歛アルモ之ヲ口實トシテ判決ヲ拒ムノ權利ナキモノトス

此ノ點ガ即チ刑事訴訟ト大ニ異ナル所ニシテ民事訴訟ノ民事訴訟タル所以專ラ茲ニ在リ抑モ人爲法ハ條理ト習慣トノ二者ニ因テ始メテ其形ヲ顯表シタルモノナレハ人爲法ノ淵源ハ條理ト習慣ニ在リ人爲法ハ條理ト習慣トニ依テ作ラレタルモノナルモ人爲ノ制定ハ逆モ人間百般ノ行爲ヲ網羅シ盡スヲ得スシテ其法律ニ不明不備欠歛アルハ

法典編纂論
者ノ好材料
世ノ新典
成家ハ宜シ
ク著者ヘ謝
辞ヲ呈ス可

固リ免レサル所ナリ然レモ人間百般ノ行爲ヲ支配スル條理若クハ習慣ハ天地ヲ極メ古今ニ互リ常ニ吾人法律社會ノ指南車トシテ法律ノ真髓ヲ示スモノナリ左レハ人爲法ニ不明不備欠歛アルキハ是レ其法律ノ淵源タル條理ニ因テ判決ヲ下サル可ラサル所以ナリ
然レモ茲ニ困難ナルハ條理ノ事ナリ條理ノ法律ノ淵源タルハ何人モ之ヲ認ムル所ナルモ甲ハ之ヲ以テ條理トナシ乙ハ之ヲ以テ條理ト爲スモ悉ク皆ナ學者ノ說ニ採ラサルハナシ學理ハ常ニ同一ナレモ學說ハ常ニ同一ナラス例ハ英法ニ於テハ買者注意セヨノ原則ヲ採用スルモ佛法ニ於テハ却テ其責ヲ賣主ニ負ハシムルノ傾キアルガ如シ故ニ英法ヲ學ブ者ハ此ヲ以テ條理ト爲スモ佛法ニ據ル者ハ

彼ヲ以テ條理ト爲ス而シテ其裁決ノ分ル、處ハ權利義務
 ナ顛倒スルニ至ル即チ或ル控訴院ガ佛法ノ原理ニ因テ言
 渡シタル裁判ヲ大審院ハ英法ノ原理ニ於テ之ヲ破毀シタ
 ルハ實際目撃シタル所ナリ蓋シ日本法官ノ眼中ニ英佛法
 ハ無カル可シト雖モ亦決シテ此ノ傾キナシトハ云フ可ラ
 サルナリ
 習慣ハ條理ト同シカラスシテ其國固有ノ特性トモ云フ可
 キモノニシテ數百年來人智民度ノ自然ニ進化シタル行爲
 ノ結果ナリ而シテ習慣ニニアリ一ハ國ノ習慣ニシテ何人
 モ之ヲ熟知スルモノ一ハ地方ノ習慣商習慣ニシテ其地方
 ノ者又ハ商人ニ非サレハ知ル可ラサルモノ是ナリ故ニ法
 律ナキモノハ習慣ニ因テ判決ス可キハ裁判官ノ職掌ナレ

凡習慣ハ條理ト違フテ裁判官ヨリハ寧ロ當事者ニ於テ熟
 知スルモノナレハ之ヲ裁判官ノ職掌ナリトテ放任シテ顧
 ミサル如キコトアル可ラス殊ニ一地方ノ習慣ノ如キハ當
 事者ニ於テ之ヲ申立サル限リハ直チニ條理ニ因テ判決ヲ
 下サル、モ不服ヲ鳴ラスコトヲ得サル可シ第二百十九條
 ニ曰ク地方慣習法商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之
 ナ證ス可シ裁判所ハ當事者ガ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハ
 ラス職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得ト然レハ則
 チ慣習ニ因テ判決ヲ下ス可キハ裁判官ノ職務ト雖トモ當
 事者之カ證明ヲ爲サ、ルキハ法律ハ習慣ナキ者ハ條理ニ
 因ルノ規定ニ從テ直チニ判決ヲ下シ得ルハ勿論ナレハナ
 リ

第五判決ハ之ヲ爲シタル裁判所ニ於テハ確定ナリトシ再
 ヒ之ヲ受理審判スルヲ得ス
 判決ニ貴フ所ノ者ハ確定ニ在リ若シソレ審理ノ不盡法律
 ノ錯誤ヲ口實トシテ之カ再吟味ヲ許スキハ法廷ノ威嚴ヲ
 損シ裁判ノ信用ヲ傷クルヲ以テ一裁判所ノ判決シタル裁
 判ハ其裁判所ニ於テハ確定トナスヲ以テ原則トナス故ニ
 其下サレタル裁判ハ不服ナルモ同一裁判所ニ向テ再吟味
 ヲ請フヲ得サルヲ以テ更ニ高等ナル控訴院又ハ大審院
 ニ對シテ控訴若クハ上告ヲ爲サ、ルヲ得ス
 然レモ第四百六十八條及第四百六十九條ノ原由アルキハ
 再審ヲ求ムルヲ得然レモ是レ例外法ニシテ已ムヲ得サル
 ニ規定シタルモノニ係ル格言ニ曰ク司法ノ誤謬ハ之ヲ匡

正セサル可ラス訴訟ハ最後ノ判決ヲ與ヘサル可ラスト旨
 アル哉

第六判決ハ公延ニ於テ必ス之ヲ言渡ス而シテ其言渡ニ付
 テハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ラス其効
 力ヲ有ス

第七判決ハ口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限り之ヲ爲ス可
 シ

第六第七ハ第二百三十五條及二百三十二條ニ規定セリ第
 六第七ニ於テ注目ス可キ點ハ口頭辯論ニ在リ何トナレハ
 訴訟ノ審理ハ口頭辯論ニ因テ其事實ヲ明知シ得レハナリ
 然ルニ口頭辯論ニ臨席セサル判事ノ如キハ其事實ノ眞否
 ヲ明知スルヲ能ハサレハ隨テ之ヲ判決スルモ其肯綮ニ中

ラサルハ固ヨリ其所ナルヲ以テ是レ第七ニ口頭辯論ニ臨
席シタル判事ニ限リ云々ノ規定ヲ設ケシ所以ナリ之ニ反
シ口頭辯論ニ於テ其事實ヲ確メ得タル當事者ニ於テハ其
是非曲直ハ既ニ口頭辯論ノ際ニ定リタレハ必シモ其言渡
ニ付キ在廷スルヲ要セサルヲ以テ是又第六ニ當事者又ハ
其一方ノ在廷スルト否トニ拘ラズ其効力ヲ有スト規定セ
ラレシ所以ナリ

第二章

闕席判決

闕席判決トハ即チ當事者中孰レニテモ其出延セサルモノ
ニ逆シテ判決ヲ與ヘタルモノヲ云フ而シテ闕席判決ガ原
告ナルトハ之ヲ稱シテ罷訴判決ト云ヒ被告ナルトハ之ヲ

抗傳判決ト稱ス

罷訴ト云ヒ抗傳ト云フモ唯其積極消極ノ點ヨリシテ之ガ
名稱ヲ附シタルニ過キズシテ闕席判決タルニ於テハ一ナ
リ然レモ亦全ク其理由ノ主眼トナス處異ナラサルニモア
ラス罷訴及抗傳ナル名ハ其訴訟ヲ放棄シ或ハ其辨護ヲナ
スヲ止メタリト法律上ノ推測ヲ爲シ得可キ所ノ行爲若
クハ懈怠ヲ指シタルナリ

第二百四十七條ニ曰ク出頭セサル一方原告ナルトハ裁判
所ハ欠席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シト是固ヨリ
至當ノ制度ナリ又第二百四十八條ニ曰ク出頭セサル一方
ガ被告ナルトハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述
ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當トナストハ

闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲
 サ、ルキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シト原告ガ訴求ニ對シ
 被告之レガ答辯權ヲ棄却シタルキハ原告ノ訴求ヲ以テ正
 當ナリト推測スルハ闕席判決ニ於ケル所ノ正當ナルモノ
 ニ非スヤ然ルニ第二百四十八條ニハ「原告ノ請求ヲ正當ト
 爲スルハ」ト如何ナル意義ナリヤ若シ原告ノ請求ニ對シ
 被告ノ欠席スルニモ拘ハラスシテ裁判官其事實部内ニ立
 入り其請求ノ當否ヲ論スル如クナレハ是レ裁判官ハ被告
 ノ代人タルニ異ナラス豈ニ斯ル理アラシヤ然ラハ則チ
 第二百四十八條ガ所謂ユル正當トハ如何不正又ハ不法ノ
 正反對チ云フカ即チ賭博ニ因テ勝ヲ制シタル金圓請求ノ
 訴訟ノ如キ不法ノモノカ又ハ春書賣買契約履行請求訴訟

日頭於被
 告合ニ於
 場欠席シ
 テハ被告
 ノ自供事
 實ニ依リ
 原告ノ自
 供事ヲ以
 テ見テ
 原被告ノ
 事實ニ對
 シテ如何
 ナル結果
 生ズルコ
 トヲ推測
 スルハ
 闕席判決
 正當ナル
 モノト爲
 スルコト
 也

ノ如キ不正ノモノカ如此キモノハ裁判所ノ正當ト爲サ、
 ルモノタルハ固ヨリナレト不正不法ノ請求ハ裁判所ノ受
 理ス可キモノニ非サルヲ以テ闕席判決ヲ俟テ而シテ後チ
 其正當不正當ヲ鑑別スルノ必要アラサルヲ奈何セン然ラ
 ハ則チ訴求事實ノ不充分ナルモノヲ云フカ口頭辨論ニ於
 テ其手續ヲ盡スニ非サレハ其眞否ヲ確ムルヲ得ス其一方
 ノ片言ヲ聽テ其裁判ヲ下スハ闕席判決ノ固有性ナレハ何
 ソ事實ノ不充分ナルヲ以テ其訴求ノ旨趣ヲ擯斥スルコト
 得ンヤ況ンヤ上ニ控訴アリ上告アリ頗フル權利伸張ノ道
 開ケリ何ソ區々ノ事裁判所ノ之ヲ干涉スルヲ須ヒンヤ然
 ラハ則チ第二百四十八條ノ末文ハは無用ノ長物ナルカ曰
 シ否然ラス然ラハ則チ正當トハ竟ニ如何曰シ矢張不正不

法ノ訴訟事件ナルヤ否ヲ鑑別シ果シテ不正不法ノ訴訟事件ナリトスルキハ之ヲ却下スルコト是ナリ請フ其然ル所以ノ理由ヲ述ヘン抑モ不正不法ノ訴訟事件ニ就キ顯著知リ易キモノアリ隱微知リ易カラサルモノアリ即チ賭博春畫ニ係ル訴訟事件ノ如キハ不正不法ノ顯著ナルモノニシテ裁判所ハ之ヲ受理ス可ラスト雖其隱微ナルモノニ至テハ原告ノ供述ヲ俟ツニ非サレハ果シテ其不正不法ナルヤヲ知リ難シ未タ裁判所ノ不正不法ト爲サ、ルモノハ之ヲ受理セサル可ラス(不受理ノ罪アレハナリ)而シテ之ヲ受理シタル後チ原告ノ供述ニ因テ始メテ其訴訟ノ不正不法タルコトヲ發見シタルニハ其訴ヲ却下ス可キハ當然ノコトナレハナリ然レモ這ハ當然裁判所ノ却下ス可キ獨立ノ理由

ナレハ特ニ被告闕席ノ件ヲ茲ニ挿ムノ必要ナキナリ然ラハ則チ第二百四十八條ノ末文ハ到底吾輩カ其理由ノ所在ヲ知ルニ苦ム所ナリ
 闕席判決ハ所謂ユル片聞裁判ナレハ之ヲ爲スニハ頗フル慎重ヲ加ヘサル可ラス今裁判官カ闕席判決以前ニ於テ注意ス可キ重要ナル事項ヲ擧クハ即チ左ノ如シ
 第一闕席判決ハ原告ノ請求ニ於テ始マル
 闕席判決ハ裁判所自ラ好ンテ之ヲ爲スニ非ラス唯原告カ適當ノ時期ニ於テ提出セラレタル訴ニ對シ被告ハ之ヲ懈怠シ審理ヲ延滞セシムルヲ以テ原告ノ利益ヲ計リテ之ヲ爲スニ在リ
 第二原告闕席判決ヲ請ハントスルニハ適當ノ手續ヲ履行

シタルコトヲ證明セサル可ラス

適當ノ手續ニ因テノ證明トハ執達吏ニ因テ被告ニ訴狀ヲ送達シタル證左ヲ提出セサル可ラサルヲ云フ何トナレハ送達アラサレハ被告ハ之ニ應ス可キ義務アラサレバナリ然ルニ既ニ適當ニ送達アリタルニモ拘ハラヌ其出席ヲ怠ルハ即チ原告ノ訴求ヲ自認シタルモノトノ推測ヲ下シ得可キヲ以テ闕席判決ヲ下スモ毫モ不都合ナケレバナリ是レ其ノ送達證ヲ要スル所以ナリ

第二闕席ヲ請求スル者カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキハ闕席判決ヲ與ヘス(第二百五十二條第一項)

職權上調査ス可キ事情トハ第七十五條ノ規定ニ於テ訴訟

能力ノ有無及法律上代理人資格ノ適否又ハ特別受權等ニ付キ欠缺ナキヤ否ヲ調査スル如キ是ナリ而シテ右諸件ノ調査ニ對シ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキハ闕席判決ノ請求ヲ乞フコトヲ許サ、ルナリ

第三闕席ヲ請求スルモノニ於テ對手ニ對シ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルキハ闕席判決ヲ與ヘス

不出廷者ハ不適當ニ因テ通知セラレタル書面ニ對シテハ之ニ答辨ス可キ義務ナシ隨テ此場合ニ於テハ未ダ闕席判決ヲ下ス時期ニ熟シタリト云フコトヲ得サルナリ之ヲ要スルニ第二第三共即時ニ抗告ヲ爲シ闕席判決ヲ請求スルコトヲ得而シテ裁判所ニ於テ其抗告ヲ理アリトナシ闕席裁判

却下ノ申渡ヲ取消シタルキハ更ニ不出廷者ヲ新期日ニ呼
 出スヲ要セスシテ直チニ闕席判決ヲ受クルヲ得
 第四裁判所ハ職權ヲ以テ合式ニ呼出サレザリシ不出廷者
 ニ對スル闕席判決請求者ニ逆シテ辨論延期スルヲ得
 第五裁判所ハ職權ヲ以テ不出廷者カ天災其他避ク可ラサ
 ル事變ノ爲メ出廷スル能ハサルヲノ眞實ト認ム可キ事
 情アルキハ闕席判決ヲ止メ更ニ新期日ニ不出廷者ヲ呼
 出ス者トス
 畢竟スルニ闕席者ニ逆シテ片言裁判ヲ與フル所以ノモノ
 ハ出廷者ノ故意又ハ懈怠ヲ推測スルニ在リ然ルニ第四第
 五ノ如キ場合ニ於テハ罷訴若クハ抗傳判決ヲ下ス可キ原
 由アラサレハナリ

闕席判決ニ對シテハ直チニ控訴ヲ爲スヲ許サスシテ矢
 張原裁判所ニ故障ヲ爲スヲ許スモノトス何トナレハ闕
 席判決ハ口頭辨論ニ因テ審理ヲ盡シタルモノニ非サルヲ
 以テ其故障ヲ取上ルモ亦一事再理ノ原則ヲ破壞スルモノ
 ニ非サレハナリ然レモ故障ヲ爲シ得ルニハ左ノ條件ニ適
 合セサル可ラス
 第一故障ヲ爲シ得可キ事實及理由
 第二法律上ノ方式ニ適合スルヲ
 第三故障期限ヲ經過セサルヲ
 以上三條件ノ内其一ヲ欠クモ之ヲ不適法ノ故障トシテ裁
 判所ハ其申立ヲ棄却スルモノナリ若シ又故障カ以上ノ三
 條件ニ適合シタルキハ之ヲ適法ノ故障トシテ該訴訟ハ闕

席前ノ程度ニ復歸ス而シテ口頭辨論ニ因テ審理ヲ盡シタル上原闕席判決カ其理由ナキハ之ヲ平翻シテ新判決ヲ下スモノトス之ニ反シ到底原闕席判決ト同一ノ論結ニ歸着スルキハ原闕席判決ヲ維持スルノ申渡ヲ爲スモノトス(第二百五十五條以下第二百六十一條參觀)而シテ故障者故障ヲナシツ、アルニモ拘ハラヌ第二百五十二條及第二百五十四條ノ原由アルニ非スシテ新辨論期日ニ出廷セサルキハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡スモノトス而シテ新闕席判決ニ對シテハ再ヒ故障ヲ申立ツルコトヲ許サス何トナレハ裁判ノ威信ヲ損シ訴訟落着ノ期ヲ紊レハナリ

第三章

判決ノ種類

判決ヲ區別シテ二トス

第一本案ノ判決

第二豫先ノ判決

本案ノ判決トハ訴點ニ向テ直チニ下ス所ノ裁決ヲ云ヒ豫先ノ判決トハ訴點ヲ裁決スルニハ先ツ他ノ點ヲ裁決セサレハ本案判決ニ進行スル能ハサル所ノ中間ノ判決ヲ云フ例ハ前例ノ電燈會社對衆議院書記官長曾禰荒助火災報告取消請求訴訟ノ如シ本訴ノ訴點ト爲ス所ハ取消ニ在リ故ニ該取消ハ本案ノ判決ノ下ル可キ點ナレハ衆議院書記官長曾禰荒助ハ本案ニ先チ妨訴ノ答辨ヲ提出シタルヲ以テ此ノ妨訴ノ當否即チ豫先ノ判決ヲ下シタル上ナラテハ

直チニ本案ニ進ンテ該報告ヲ取消ス可キ義務アルヤ否ヲ
 判決スル能ハサル如シ又預金取戻ノ訴訟ヲ提起シタルキ
 ハ該取戻ガ本案ノ訴點ナレハ當事者ノ資格ニ就キ原告タ
 リ若クハ被告タル可キ權利義務ナシトハ抗辨ヲ爲シタル
 キハ其資格ノ當否ニ就キ中間判決ヲ與ヘタル上ナラテハ
 預金ヲ取戻シ得可キヤ否ノ本案ヲ判決スル能ハサルカ如
 シ又原告ハ先キニ提出シタル訴旨ヲ改正シタルキハ其改
 正ハ第九十六條ノ事項ニ該當シテ唯旨趣ヲ擴張若クハ
 減縮シタルモノナルヤ將タ第九十五條第三項ニ由リ其
 旨趣ヲ變更シタルモノナルヤ否ノ疑問カ本案訴點ニ先ッ
 テ起ルキハ裁判所ハ職權ヲ以テ之レガ中間判決ヲ下シタ
 ル後チニアラサレハ本案判決ニ進行スル能ハサル如シ而

是レ既々起
 ル處ノ問題

シテ第九十六條ノ原由ニ適當セルモノトノ中間判決下
 リタルキハ直チニ進ンテ本案判決ヲ下シ得ルガ如キ是レ
 ナリ
 本案裁判ハ終局判決ナリ(第二百二十五條ニ曰ク訴訟カ裁
 判ヲ爲スニ熟スルキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲
 ス同時ニ辨論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數個ノ訴訟
 中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ一ノ訴ヲ以
 テ起シタル數個ノ請求中ノ一個又ハ一個ノ請求中ノ一分
 又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テ本訴若シクハ反訴ノミ裁
 判ヲ爲スニ熟スルキハ本案ノ全体ヲ判決セスシテ唯其本
 訴若シクハ反對ノミニ付テ一部判決ヲ下スヲ得然レハ其
 判決セラレタル一部判決ハ即チ終局判決ナリ茲ニ請求ノ

原因ト數額トニ付キ爭アルキハ先ツ其原因ニ向テ判決ヲ與フ可キハ第二百二十八條ニ於テ之ヲ規定セリト雖此ノ判決ハ豫先判決ナルヤ本案判決ナルヤ否ノ疑問ヲ生ス可シ然レモ請求ノ原因ニ付テノ判決ハ豫先即チ中間判決ニ非サルナリ何トナレハ請求ノ原因ハ訴點ノ骨子ニシテ數額ハ唯其差異ニ付テ爭論アルノミナレハナリ故ニ此場合ノ判決ハ本案判決一部判決即チ終局判決ナリト云ハサル可ラス故ニ第二百二十八條ニモ請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止スト規定セラレタル所以ナリ

第二百四十二條ニ曰ク主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ

費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シト是レ瑣々タル點ヲ苦情トナシテ抗告控訴等ヲ爲シ無用ノ煩勞ヲ費サ、ラシメントノ精神ニシテ既往ノ弊ヲ鑑ミラレテノイナラン

之ヲ要スルニ終局判決ト云ヒ一部判決ト云ヒ仲間判決ト云ヒ追加判決ト云フモ總テ本案及ヒ豫先ノ二判決中ニ包含ス而シテ追加判決ノ或ル部分ハ附帶判決ノ中ニ包含スルナリ而シテ附帶判決ハ當事者ノ請求ナキモ主タル判決ト同時ニ當然言渡ス可キモノト規定セリ故ニ判決ノ種類ニハ附帶判決モ亦之ヲ加ヘサル可ラストセハ

第一本案判決

第二豫先判決
第三附帶判決
以上

第七編

上訴

第一章

上訴ノ性質

上訴トハ下級裁判所ノ裁判ガ確定セサル時期ニ於テ上級
裁判所ヘ向テ破毀ヲ請求スルヲ云フ即チ第一審裁判所ノ
裁判ニ對シテハ第二審裁判所ヘ上訴シ第二審裁判所ノ裁
判ニ對シテハ第二審以上ノ上級裁判所ヘ上訴スルナリ故
ニ區裁判所ノ裁判ニ不服ナルキハ區裁判所ニ對スル第二

審裁判所即チ地方裁判所ニ對シ猶ホ第二審ナル地方裁判
ノ裁判ニ不服ナルキハ其上級ナル控訴院ニ上告スル如シ
又第一審ナル地方裁判所ノ裁判ニ不服ナルキハ第二審ノ
控訴院ヘ上訴シ控訴院ニ於テノ裁判ガ不服ナルキハ更ニ
上級ナル大審院ニ向テ破毀ヲ求ムル如シ而シテ區裁判所
ニ於ケル控訴院地方裁判所ニ於ケル大審院ハ法律ノ違反
ヲ匡正スルヲ以テ任トナシ決シテ事實ノ如何ニ關涉スル
ヲナシ而シテ事實及事實法律ノ覆審ヲ求メテ之カ破毀ヲ
請フヲ控訴ト云ヒ法律ノミノ正誤ヲ求ムルヲ上告ト云フ
而シテ上訴ノ簡且便ニ單ニ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口
頭辨論ヲ經スシテ却下シタル裁判其他決定命令ニ對シ不
服ヲ申立ツルヲ云フ故ニ上級裁判所ニ上訴スルノ點ニ至

テハ同一ナリト雖厄控訴上告トハ大ニ其性質ヲ異ニスル
 モノトス
 上訴ハ何ノ爲メニ之ヲ設クルヤ即チ權利伸張ノ道ヲ拓キ
 吾人ヲシテ冤枉ニ屈スルナカラシメンガ爲メナリ夫レ裁
 判ハ之ヲ爲シタル裁判所ニ於テハ確定トナスヲ以テ原則
 ト爲スハ既ニ前章ニ於テ論述セシ所ナリ然ルニ法律ハ權
 利伸張ヲ重ニスレハトテ之ヲ同一裁判所ニ向テ不服ヲ訴
 フルコトヲ許ストセハ以上ノ原則ヲ破壞スルモノナルヲ以
 テ別ニ他ノ裁判所ニ於テ之レカ權利伸張ノ門戸ヲ開カサ
 ル可ラス且ツ同一裁判所ニ向テ同一事實ヲ再審セシムル
 モ常ニ原裁判ト同一ナル裁判ヲ爲ス可シ若シソレ原裁判
 ト反對ナル裁判ヲ下ストセハ是レ自ラ立テ、自ラ破ルノ

愚ヲ學ハシメサル可ラス是レ爲シ得可ラサル事ナ人ニ責
 ムルモノト云フ可シ故ニ以上ノ原則ヲ思想ノ外ニ於テ之
 ナ考フルモ原裁判所ニ再訴ス可ラサルノ理ハ照々タリ是
 レソノ權利伸張ノ門戸ヲ開カサル所以ナリ然レ厄其門戸
 ハ原裁判ト同格ノ裁判所ニ於テセシメヌシテ更ニ高等ノ
 裁判所ヲ以テ之レニ充ツル所以ノモノハ同格ノ裁判所ハ
 同格ノ裁判所ノ誤謬ヲ匡正ス可キ器量ナシトスルニ在リ
 換言セハ其職權ナキナリ更ニ之ヲ云ヘハ覆審ヲ爲スハ其
 初審ニ於ケルヨリモ一層鄭重ニ其手續ヲ盡シ權利伸張ヲ
 慎マサル可ラス初審裁判官ヨリ老鍊ニ且學識アル裁判官
 ナラサル可ラス初審ヨリ階級高キ法術ニ非サレハ其誤謬
 ナ匡正ス可キ權力ニ乏シク隨テ其威信ヲ損スルノ恐レア

レハナリ

夫レ然リ故ニ上訴ノ門ヲ開ク然リト雖モ裁判ニ貴フ所ノ
モノハ確定ニ在リ裁判ニシテ確定セス常ニ循環小數ノ如
クナレハ權利伸張ヲ保護スルニ非スシテ却テ之ヲ傷クル
ニ至ル是ヲ以テ法律ハ權利伸張ノ門ヲ開クト同時ニ又訴
訟落着ノ點ヲ重セサル可ラス是ソノ裁判ニ上訴期限ノ制
度ヲ設ケ妄訴ノ弊ヲ制限スル所以ナリ

第二章

控訴

控訴ハ第一審裁判所ノ裁判ニ服セスシテ第二審裁判所ニ
事實及事實法律ノ覆審ヲ請求スルヲ云フ而シテ控訴裁判
所ニ二種アリ

(一) 控訴院

(二) 地方裁判所

控訴院ハ其名ノ指ス如ク純然タル控訴裁判所ニシテ地方
裁判所ハ限權裁判所即チ區裁判所ノ裁判ニ對シテ第二審
ノ地位ニ立ツ所ノ控訴裁判所ナリ

今茲ニ控訴シ得ルニハ如何ナル資格ニ適合セサル可ラサ
ルヤヲ吟味セン

第一構成法ニ於テ規定シタル上訴期限ヲ經過シタルモノ
ハ控訴ヲ許サス

第二故障若クハ抗告ヲ爲シ得可キモノハ控訴ヲ許サス但
シ第二百六十三條第一項及第二項ニ依テ新闕席判決ヲ
受ケタル者ニ對シテハ懈怠ナカリシヲ理由トスルハ

ニ限リ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ許ス
 故障抗告ニ付キ控訴ヲ許サ、ルモノハ故障抗告其レ自身
 ニテ權利伸張ノ道存シ必スシモ控訴ヲ爲スノ必要アラサ
 レハナリ然レハ新闕席判決ノ如キハ故障ヲ許サ、ルヲ以
 テ不出廷者ニ於テ毫モ懈怠ノ原由アルニモ關セス此判決
 ナ受シルキハ他ニ權利伸張ノ道ナキヲ以テ法律ハ懈怠ナ
 カリシコノ理由存スルキハ特ニ控訴シ得ルモノト規定セ
 シナリ

第三判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス
 判決ノ効力ヲ生スルハ其送達ヲ以テ始マル然ルニ未タ判
 決書ノ送達前ニ於テハ確定時期ヲ起算ス可キ點ナキヲ以
 テ控訴ヲ爲スモ無効トナス何トナレハ控訴ヲ爲シ得可キ

時期ハ判決送達ヨリ向フ三十日ノ期間ナレハナリ

第四控訴期限内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルキハ

追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

原判決ハ追加裁判ヲ得テ始メテ完璧ナル裁判トナリタル
 ナ以テ即チ其裁判ノ送達ヨリ起算シ以テ控訴人ニ利便ヲ
 與ヘサル可ラス

第五事實上法律上判然控訴ノ理由ナキ者ハ之ヲ許サス

此ノ規定ハ最モ實際ニ必要ヲ視ルナリ何トナレハ事實上
 法律上明白ニ控訴ノ理由存セサルニモ拘ハラズ確定時期
 ノ到着シ執行ノ鞭達之ニ加ハルヲ恐レ無名ノ控訴ヲ起シ
 法廷ノ尊嚴ヲ玩弄セシハ世間往々ニシテ之レアル所ナレ
 ハナリ

第六一タヒ取下ケタル控訴ハ再ヒ之ヲ爲スヲ許サス
 一タヒ取下ケタル控訴ト雖モ其期限内ハ再ヒ之ヲ受理シ
 テ可ナル如クナレモ控訴ハ尋常ノ訴訟ト違ヒ慎重ヲ要シ
 輕舉ニ之ヲ爲ス可ラサルモノナルヲ以テ一タヒ取下ケタ
 ル控訴ハ政略上ノ理由ヲ以テ訴權ヲ喪失シタルモノト看
 做シ再ヒ控訴ヲ爲スヲ許サス
 第六被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルモ又ハ控訴期限
 ノ經過シタルモト雖モ附帶控訴ヲ爲スヲ得(第四百五
 條第一項)

是第三百九十九條等ニ於ケル規定ト相反スルモノニシテ
 控訴人ト控訴効力ノ同シカラサル所トス抑モ控訴ハ原判
 決ノ確定ヲ當事者間ニ逆シテ妨過スルモノナルヲ以テ被

控訴人ハ自己カ自ラ控訴ヲ拋棄シ又ハ控訴期限ヲ經過ス
 ルモ附帶控訴ヲ爲シテ原判決ノ變更アテノヲ申立ツル
 ヲ得然レモ左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ
 モノトス即チ附帶控訴ヲ爲スモ主控訴ヲ不當トナシテ却
 下シタルモ又ハ主控訴ノ願下ニ因テ其効力ヲ失フト是ナ
 リ(第四百六條第一項第二項)此規定ハ唯附帶控訴ノ効力ヲ
 裏面ヨリ論斷シタルニ過キスシテ附帶控訴ノ性質ニ對シ
 テ例外ヲ設クルモノニ非サルナリ
 第七然レモ附帶控訴カ控訴期限内ニ於テ爲サレタルモ
 之ヲ獨立ノ控訴ト爲シ其効力ヲ失ハシメス
 第六ハ附帶控訴カ主控訴ト其運命ヲ共ニス可キ性質ヲ論
 斷セルモノナリ夫レ然リ然レモ附帶控訴ト雖モ主控訴ニ

對抗シテ既ニ附帶控訴ヲ爲ス時ハ其控訴ヲ爲スト同時ニ其時ヨリ本控訴ガ享有スル丈ノ權利ヲ享有シ毫モ純然タル控訴ト其効力ヲ異ニセス何トナレハ原告ノ位地ニ立ツモ被告ノ位地ニ立ツモ均シク第一審裁判ノ不當ヲ攻撃シ其覆審ヲ仰クモノナレバナリ故ニ一旦附帶控訴ヲ爲シタルキハ其後ニ至リ主控訴カ控訴ノ願下ヲ爲スニ拘ハラズ附帶控訴ハ依然存立シテ毫モ之レカ爲メニ左右セラレサルナリ此ノ場合ニ於ケル附帶控訴ヲ獨立ノ控訴ト看做ス所以ハ既ニ附帶ノ性質ヲ脱シテ主控訴同一ノ位地ニ立テハナリ

審理

控訴ハ其控訴シタル訴點ノ外ニ出ルヲ得ス換言セハ第

一審裁判所ノ判決ニ就キ其不服ナル全部若クハ一部ノ破毀ヲ求ムル點ノ外ニ涉ルヲ許サス何トナレハ控訴ハ原裁判ノ不服ナル點ヲ覆審スルモノナレハナリ然レモ其覆審ヲ爲スニ於テハ控訴裁判所ノ眼中ニ第一審裁判所ナク恰モ曾テ審理ヲ經サルモノ、如ク再ヒ新審糺ヲ爲ス是レ控訴カ上告ノ審理スル點ト異ナル所以ナリ(第四百十一條

參觀

夫レ然リ故ニ控訴々點ノ範圍外ニ涉ラサル限リハ(即チ原裁判ニ對スル全部若クハ一部ノ不服ナル點ヲ破リ更ニ適當ノ裁判ヲ請求スル一定ノ申立ニ限リ)充分ニ權利伸張ノ方針ヲ取ラサル可ラス茲ニ控訴審理ノ重要ナル事項ヲ舉クレハ即チ左ノ如シ

第一控訴々點ノ範圍内ニ於テ曾テ第一審ニ於テセサリシ
新事實及新證據ヲ提出スルコトヲ得

所謂ユル控訴々點ノ範圍内トハ爭點若クハ爭點關係ヲ確
ムルニ必要ナル新事實若クハ新證據ナラサル可ラス又茲
ニ注意ス可キハ其新事實及新證據ハ如何ナル事情及理由
ニ因テ第一審裁判所へ提出シ得サリシヤ否ヤヲ查察スル
ヲ要ス若シ其ノ新事實及新證據ガ從タル事實若クハ間接
證據ニ止リ管ニ情供證左丈ケノ効力位ナレハ左程ノ注意
ヲ要スルニ足ラスト雖モ彼ノ最良證據即チ一等證據タル
價值ヲ有スルモノナレハ裁判官ハ宜ク深思熟慮シテ新事
實新證據ノ提出者ニ逆シテ何故ニ斯ル良證據ヲ提出シ能
ハサリシヤノ事情及理由ヲ檢案シ若シ適當ノ理由ニ於テ

提出セラレサリシナラバ詐欺ノ推測ヲ以テ之ヲ擯斥ス可
シ然ラサレハ奸黠ヲ助ケ正良ヲ害スルノ恐レアレハナリ
好シ又其新事實及新證據ハ毫モ詐欺ニ因テ作ラレタル者
ニ非ストスルモ其新事實新證據ガ適當ノ事情若クハ理由
アルニ非スシテ之ヲ第一審ニ提出セサルモハ是又斷然之
ヲ擯斥ス可シ斯ク云ヘバ甚ダ過酷ナルカ如シト雖モ世ノ
狡獪者ハ最良證據アルモ故ラニ之ヲ第一審ニ提出セズシ
テ知リツ、其敗訴ヲ來タシ第二審ニ於テ突然良證據ヲ提
出シ十全ノ勝利ヲ博シ莫大ノ訴訟入費ヲ貪ル者多シ此徒
ノ眼中ニハ裁判ニ第一審ナルモノナク唯第一審裁判ヲ玩
弄シテ奇勝ヲ制スルノ踏臺トナスニ過キサルナリ然レモ
是レ法律ノ注意周到ナラサルニ在リテ必大シモ其狡獪ヲ

今日肩書ヲ
所有スル學
士ノ生ニ道
ノ先公ナ
キカ

答ム可ラス獨リ自ラ清フシテ正理ノ内ニ踰跡セハ是レ即
チ宋襄ノ仁ナランノミ我法律ハ稱ノ周密周到ナリ人或ハ
其冗雜ヲ罵ルニモ拘ハラヌ獨リ此點ニ就キ一言ノ注意ヲ
付ケ加ヘサルハ平生ノお手際ト背反スルニ似タリ如何
第二訴ノ變更ハ之ヲ許サス
訴ノ變更ハ之ヲ許サハルノミナラス對手ノ承諾アルキト
雖凡之ヲ許サス何トナレハ控訴ハ第一審裁判ノ不服ナル
點ニ就キ覆審ヲ求ムルニ在レハナリ夫レ訴ノ變更ハ訴ノ
新ナルモノニシテ即チ原請求ヲ廢棄シテ新請求ヲ爲スナ
レハ是即チ新訴ナリ新訴ハ第一審ノ受理審判スベキモノ
ニシテ第二審ノ審判スベキ性質ノモノナラサレハナリ然
レ凡實際ニ於テ訴ノ變更ナルヤ訴ノ旨趣ヲ擴張若クハ減

縮シタルモノナルヤ否ノ疑問生スルキハ第九十五條第
百九十六條ニ因テ之ヲ決定セサル可ラス

第三第一審裁判所ニ提出セザリシ妨訴ノ抗辨ハ之ヲ爲ス
コトヲ許サス

妨訴抗辨ハ本案以外ニ於テ之ヲ拒ムモノナルニ之ヲ第一
審裁判所ニ主張セスシテ既ニ訴點ノ審理上ニ就キ事實及
法律ノ辨論ヲ以テ本案事實ノ裁決ヲ經タルモノハ妨訴抗
辨ノ權利ヲ拋棄シタルモノナリトノ法律上ノ推測ヲ下シ
得可ケレハナリ然レ凡妨訴ノ抗辨ト雖凡裁判所ノ職權ヲ
以テ調査ス可ラサルモノニシテ且之ヲ爲サハル者ニ故意
又ハ過怠ニ非スシテ第一審ニ於テ妨訴抗辨ヲ提出シ能ハ
ザリシコトヲ説明スルキニ限り法律ハ殊ニ之ヲ主張スルコ

許ス(第四百十四條參觀)

第四控訴ニ於テハ妨訴ノ抗辨ヲ許ストキト雖モ之レガ爲
メ本案ノ辨論ヲ拒絕スルコトヲ許サス
此場合ニ於テ妨訴ノ抗辨ハ第一審裁判所ニ於テ提出セサ
ルモノナレハ即チ新答辨ナリ新答辨ハ覆審ヲ請求スル原
由ノ内ニ入ラサルナリ且第一審ニ於テハ妨訴ノ抗辨ニ因
テ本案ヲ攻撃セシメテ本案ノ事實及法律ニ就テ之ヲ答辨
シ而シテ既ニ本案ノ裁決ノ或ル點ガ(全部若クハ一部)覆審
ノ原由トナリタルモノナレハ若シ此場合ニ於テ猶ホ妨訴
ノ抗辨ニ因テ本案ノ辨論ヲ拒ミ得可シトセハ是第二審ノ
性質ヲ離レテ第一審ノ位置ニ立ツ者ト云ハサル可ラサレ
ハナリ故ニ第四百十四條ニ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ

妨訴ノ抗辨ニ付キ分離シタル辨論ヲ命スルコトヲ得ト規
定セシハ審理處分ノ當ヲ得タルモノト云フ可シ(余ハ別ニ
論アリ)然レトモ是妨訴抗辨ガ第一審ニ提出セラレサリシ
場合ニ適用ス可キノミ若シソレ第一審以來妨訴抗辨ヲ以
テ訴訟ガ進行シツ、來リタルキハ此限リニ非ス但シ終局
判決ニ對シタル妨訴抗辨ナラサル可ラス
謹テ第四百七條及第四百十五條ヲ以テ第四百十四條ヲ按
スルニ一ハ第一審ニ提出セサリシ新事實新證據ヲ提出シ
攻撃辨論ヲ下スコトヲ許シ一ハ第一審ニ提出セサリシ妨訴
ハ之ヲ許サス又好シ之ヲ許スモ本案辨論ヲ拒ムコトヲ許サ
、ルガ如キハ彼レニ厚クシテ此ニ薄フスルノ傾ナキカ何
トナレハ第一審ニ於テ妨訴ヲ爲サスノ直チニ本案ニ入リ

新事實新證據
 提出新證據
 抗辯之事實
 同一之事實
 共同之事實
 其性質之異
 ナニハナリ

タルヲ以テ妨訴權ヲ拋棄シタリトノ推測ヲ下スヲ得ハ
 第四百七條第四百十五條ニモ此推測ヲ下シ新事實新證據
 ナ提出スル權利ヲ拋棄シタリト看做ス可キハ當然ノ事ナ
 レハナリ若又新事實新證據ヲ提出セシムルヲ以テ當事者
 ノ權利伸張ヲ圖ルモノトセハ妨訴モ亦之ヲ許シテ權利ヲ
 伸張セシメサル可ラス例ヘハ展々引用セシ電信會社對衆
 議院書記官長曾禰荒助火災報告取消訴訟事件ノ如シ今假
 リニ被告ハ第一審ニ於テ妨訴ノ抗辯ヲ爲サスシテ火災報
 告取消ノ義務ナキ點ニ就キ答辯ヲ爲シタリト假定セヨ而
 シテ被告ハ又今第四百十四條第一項ニ依テ妨訴ヲ爲スヲ
 許ルサレシト假定セヨ而シテ衆議院書記官長曾禰荒助カ
 此場合ノ位地ハ如何ト云フニ「本案ノ辨論ハ妨訴ノ抗辯ニ

基キ之ヲ拒ムヲ得ス」トアルヲ以テ忌ヤ忌ヤナガラモ本
 案ノ辨論ニ就テモ取消ノ義務ガ有ルトカ無イトカノ辨論
 ナ費サ、ル可ラサルハ自然ノ情勢ニシテ獨リ毅然トシテ
 妨訴ノ答辯ヲ以テ本案ヲ排斥スルヲ得サル可シ豈不便
 且不道理至極ニ非スヤ而シテ妨訴ノ抗辯ハ控訴裁判所ノ
 認可(勝)スル所トナリタリトセハ如何本案辨論ニ時ヲ費セ
 シハ實ニ徒勞ニ屬スルノミナラス第四百十四條ノ第二項
 ハ爲メニ其光明ヲ失ヒタルモノナリ何トナレハ妨訴ノ抗
 辨ニ其理由アルキハ本案ニ於テ義務アリヤ否ヤノ判決
 ナ下ス性質ヲ失ヒタレハナリ然ルニ猶此場合ニ於テモ強
 テ第四百十四條ヲ適用セントスルハ魔術ニ長ケタル者ニ
 非サレハ能ハサル所ナリ若シ又妨訴ノ抗辯ト本案ノ辨論

ト抵觸セハ如何即チ一方ニ於テハ妨訴ノ抗辨ヲ理アリト
 ノ原告ニ無訴權ナルヲ認メ他ノ一方ニ取消義務アルヲ認
 メハ如何斯ルコトハ万有ル可ラサル事實及理由ナレモ第四
 百十四條ハ此場合アルヲ想像スル者ニ似タリ人或ハ曰ク
 子ガ論スル所ノ如キハ所謂ユル極端ノ論ナリ第四百十四
 條第二項ノ場合ヲ規定セシ眞意ハ管轄違ニ係ル妨訴ノ時
 ノ如キヲ指シ一般ニ之ヲ云フニ非ラス例ヘハ横濱地方裁
 判所ノ管轄ニ屬ス可キモノナルニ之ヲ東京地方裁判所ニ
 於テ受ケタルモ如シ而シテ被告ハ第一審ニ於テ妨訴ノ
 抗辨ヲモ爲サスシテ之ヲ第二審應ニ於テ妨訴スル如キ若
 シ斯ル妨訴ヲモ採用スルトセハ徒ラニ訴訟ノ落着キ遲滯
 セシムルノミナルヲ以テ此規定ヲ要セシ所以ナリト然レ

凡第四百十四條第一項ニ「職權ヲ以テ調査ス可ラサルモノ
 ニシテ」云々トアリ或人カ管轄違ノ妨訴ノ如キハ所謂ユル
 職權ヲ以テ調査ス可ラサルモノナルヤ阿々
 第五本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮
 スルコト
 第六最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムル
 第七相殺スルコトヲ得ベキモノニシテ第一審裁判所ニ於テ
 過失ナクシテ之ヲ提出セザリシコトヲ疎明スルモ
 (以上第四百十六條第九十六條第一項及第二項參觀)
 以上之ヲ第二審應ニ於テ審理スル所以ハ無用ノ手數ヲ省
 キ必然起生ス可キ訴訟ノ數ヲ減シ簡便ヲ主トシテ訴訟ヲ

落着スルニ在リ即チ第五ノ如キハ本案ヲ變更スルモノニ
 非スシテ唯々之ヲ擴張又ハ減縮スルニ止リ敢テ之ヲ新訴
 ト看做ス可ラサルモノナルヲ以テ第一審ニ差戻ス程ノ手
 數ヲ經歷ス可キモノニ非ラス又第六ノ如キハ訴訟ノ目的
 物消滅ニ係ルヲ以テ是又簡便ヲ主トシテ第二審ニ於テ之
 ナ審理スルモ事ニ害ナクレハナリ又第七ノ如キハ自己ノ
 過失ニ出テタルモノハ格別苟モ過失ニ非スシテ相殺ヲ求
 ムルヲ得ストセハ必ス他ニ之ヲ伸張スルノ方法ニ因ラ
 サル可ラサレハナリ(即チ第一審裁判所ニ相殺ノ訴ヲ起ス)
 是レ二重ノ裁判ヲ一時ニ裁決シ得ルノ利益アレハナリ
 第八第一審ニ於テ事實及證據ニ付キ爲サ、リシ陳述及拒
 ミタル陳述ハ之ヲ主張スルヲ得

事實及證據ニ就キ毅然之ヲ拒ミタル陳述ノ如キハ無論第
 一審ノ口供ニ登錄シアルナル可ケレハ只サラ々々ト其拒
 ミシ事實ヲ陳述スルノミニテ可ナレ其爲サ、リシ所ノ
 陳述ハ力メテ之ヲ主張セサル可ラス何トナレハ原裁判ニ
 於テ爲サ、リシ所ノ陳述ハ既ニ暗黙上ノ自認ト見做セハ
 ナリ(第百十一條第二項參觀)
 第九第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ反證ヲ擧テ之
 ナ攻撃スルヲ許サス
 自白ニ法廷上ノ自白法廷外ノ自白アリ法廷外ノ自白ハ反
 證ヲ擧テ之ヲ攻撃スルヲ許スモ法廷上ノ自白ハ一旦之
 ナ爲シタルハ再ヒ之ニ反言スルヲ許サス是レ即チ裁
 判上ノ自白ナリ(第四百十八條參觀)之ヲ訴訟ノ詞ニ於テハ

辨論上ノ自認ト云フ即チ自白ノ一種ニシテ強認ト云フモ
ノナリ夫レ然リ然レモ裁判上ノ自白ト雖自白者ノ自白ノ
精神ヲ拘束シテ之ヲ言ハシメタルモ第二審ト雖モ之カ
反證ヲ拒絕スルガ如キ不正ノコトナキハ固ヨリ其所ナル可
シ

第十第一審ニ於テ訴點ノ必要ニ對シ辨論及裁判ヲ爲サ、
ルモト雖モ訴點ヲ確ムルニ當然必要ナル攻撃辯護ハ之
ヲ爲スコトヲ得

一方ノ是認シ一方ノ非認スル訴點ヲ確ムルニ必要ナル論
點事實及論點關係事實ノ陳述及其立證ハ訴點ノ所在ヲ探
求スルニ必然爲サ、ル可ラサルモノナルニ原裁判所ニ於
テ之ヲ遺漏シ辨論及裁判ヲ爲サ、リシハ即チ審理點ノ不

充分ナルモノナルヲ以テ即チ之ヲ補充スルガ爲メ第二審
裁判所ニ於テ更ニ之ヲ辨論及裁判ヲ爲ス可キハ固ヨリ審
理ニ固有ナル性質ヲ充タスモノニシテ覆審裁判ナルガ故
ニ特例ヲ設ケタルモノニ非サルナリ(第四百二十一條參觀)
茲ニ第二審裁判所ニ於テ控訴ヲ受理スルモ猶之ヲ第一審
裁判所ニ差戻ス場合アリ即チ第四百二十二條ノ規定ナリ
其條ニ曰ク控訴裁判所ハ左ノ場合ニ所テ事件ニ付キ尙ホ
辨論ヲ必要トスルモハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可
シ

第一不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ナルモ
第二不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ニ對スル故
障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルモ

第三不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノミニ付キ裁判
ヲ爲シタルモノナルキ

第四請求カ其原因及ヒ數額ニ付争アル場合ニ於テ不服
ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲
シタルモノナルキ

第五不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及爲替訴訟
ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ進行ヲ爲ス權ヲ留
保シタルモノナルキ

之ヲ要スルニ悉ク未ダ第一審ニ於テ訴訟ヲ完結シタルモ
ノニ非サルヲ以テ控訴裁判所ハ之ヲ受理審判スルノ時期
ニ熟セサルヲ以テ之ヲ第一審裁判所へ差戻スモノト規定
セラレタルナリ

又第四百二十三條ニ曰ク第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ
規定ニ違背シタルハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタ
ル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス
ヲ得ト是又單ニ訴訟手續ニ違背シタルノミニシテ本案
ニ立入ラサルヲ以テ之ヲ差戻シテ第一審ノ審判ヲ受ケシ
ムル所以ナリ

第二章

上告

上告トハ專ラ法律ノ誤謬ヲ匡正スルヲ司リ決シテ事實
ニ干渉スルヲナシ而シテ帝國ニ唯一ナル大審院實ニ斯權
ヲ掌握ス然レモ區裁判所ノ上告ニ就テハ之ヲ大審院ニ訴
フルヲ許サスシテ控訴院之レガ任ニ當ル(構成法第三十

條)故ニ上告裁判所ハ純粹ノ上告裁判所大審院ト區裁判所
 ノ上告裁判所即チ控訴院ノ二者トス第四百三十二條ニ曰
 ヲ上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ爲シタル終局
 判決ニ對シテ之ヲ爲スト是ナリ
 夫レ上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルヲ理由トスルキ
 ニ限リ之ヲ爲スヲ得ルトハ何人モ熟知スル所ナレトモ如
 何ナルヲガ法律違背ナルヤ之ヲ明知スルハ頗フル困難ノ
 問題ナリ我訴訟法ハ法律違背ノ定義ヲ下シテ曰ク「法則ヲ
 適用セス又ハ不當ニ適用シタルキハ法律ニ違背シタルモ
 ノトス」ト且猶進ンテ其場合ヲ指示セラレタリ余ハ今之レ
 ヲ朗讀セン
 第四百三十六條裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背

シタルモノトス

- 第一規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサルキ
- 第二法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ
 裁判ニ參與シタルキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除
 斥ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシキハ此限ニ非
 ラス
- 第三判事ガ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メ
 タルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルキ
- 第四裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルキ
- 第五訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從
 ヒ代理セラレサリシキ
- 第六訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯

論ニ判キ裁判ヲ爲シタルキ

第七裁判ニ理由ヲ付セザルキ

讀者試ミニ獨逸訴訟法上告ノ部ヲ緝キ法律違背ノ場合ヲ
熟視シ而シテ之ヲ茲ニ對照セヨ唯語句ノ前後文字ノ差異
アルノミニニシテ一々皆同キヲ母法ナル獨逸法ヲ以テ子
法ナル我訴訟法ヲ觀察セハ其精神骨髓ノ存スル所ヲ知ル
蓋シ思半ニ過ン余ハ今暫ラジ以上ノ各法律違背ノ場合ヲ
畧解セン
即チ判決裁判所ヲ構成セサルキトハ地方裁判所ニ於テハ
三名ヲ以テ組織シ控訴院ニ於テハ五名ヲ以テ組織シタル
裁判官ヲ以テ合議裁判ヲ爲ス可キニ其規則ニ背戾シタル
キノ如キハ第一ノ場合ナリ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタ

ル判事云々トハ法律上回避ス可キ裁判官即チ法律カ裁判
官ノ判決權ヲ剝奪シテ無能力ト爲シタル場合ニ於テ裁判
ニ干與シタルキ或ハ裁判官ニ偏頗ノ恐アルカ爲メ忌避ノ
申立ヲ受ケ且其申立ヲ理由アリト認メタルニモ拘ハラヌ
進ノテ裁判ニ干與シタルキノ如キハ第二第三ノ場合トス
第四ハ説明ヲ要スル程ノコトナシ第五ハ即チ原告又ハ被告
カ訴訟上法律ニ從テ正當ニ代理セラレサルキ是ナリ口頭
審理ニ基キ爲シタル裁判ニシテ審理ノ公行規則ニ背反シ
タルキハ第六ニシテ第七ハ之ヲ略ス要スルニ法文ノ文字
ヲ變更シ又ハ顛倒シテ之ヲ説明シタルニ過キス
法律違背ノ場合ハ第一ヨリ第七ニ至ル場合ニ因テ之ヲ了
ス然レモ是レ手續上ニ關スル法律規則ノ違反ノミ豈ニ之

ヲ以テ法律違背ノ神髓ヲ盡セリト云フヲ得ンヤ「法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルル」ノ點ハ未ダシナリ余ハ此點ニ就テ大ニ攻究ヲ要セントス

法律違背ヲ分析シテ左ノ二點トス

第一審理制定シタル事實ノ點ニ就テハ法律ニ違背スルヲナキモ法律ヲ適用スル上ニ於テ法律ニ違背シタルヲ

第二審理制定シタル事實ニ向テ法律ヲ適用スル上ニ於テハ法律ニ違背シタルヲナキモ其根原タル事實ヲ審理制定スルニ就キ法律ニ違背シタルヲ

第一ノ點ハ審理認定シタル事實ヲ裁決スルニ當リ不當ニ法律ヲ適用スルカ若クハ法文ヲ適用セサルニ因リ法律違背ノ裁判トナリタルルヲ云フ即チ某事實ニ就テハ某法律

ヲ適用ス可キニ某ノ法律ヲ適用セズシテ他ノ法律ヲ適用シタルルカ又ハ某事實ニ對シ全ク法律ヲ適用セサルルノ如シ例ヘハ裁判官カ某事實ヲ以テ追認ノ事實ト審理認定シタルニモ拘ハラズ法律ヲ適用スルニ於テ追認ニ於ケル默諾行為ノ法律ヲ適用シテ勝訴ト爲ス可キヲ却テ契約ナキノ法理ヲ擴充ノ敗訴ノ言渡ヲ爲スカ如キ又ハ追認ノ事實ヲ審理制定シ置キナガラ此點ニ向テハ之ヲ度外ニ附シテ法律ヲ適用セサルガ如シ又請負仕事ニ於テハ獨立營業請負人ノ行為ニ對シテハ請負師ハ其責ニ任セサルヲ以テ原則トナス然ルニ裁判官ハ獨立營業請負ノ事實ヲ認定シタルニモ拘ハラズ純粹ノ代理法ノ原則ニ因テ請負師ニ責任アリト判定シタルルノ如キハ法律ノ適用ヲ誤リタルル

ノ如キ又ハ獨立營業請負ノ點ニ就テ法律ヲ適用セサルモ
 ノ如シ而シテ最モ簡易ナルハ審理認定ヲ要スルニ及ハス
 直チニ事實ソレ自ラガ其儘ニ法律ノ適用ヲ得ント欲スル
 モノニシテ即チ確定裁判ノ期限ニ關スル上告確定裁判ハ
 判決送達ヨリ起算ス可キニ判決言渡ヨリ起算シタルモ
 如キ是ナリ其他買主注意セヨノ原則ヲ賣主ニ逆シテ適用
 ス可キニ却テ之ヲ買主ニ逆シテ言渡シタルモ如キ屈指
 スルニ違アラス之ヲ要スルニ總テ法律適用ノ上ニ於テ法
 律ノ適用ヲ誤ルヲ云フ
 第二ノ點ハ第一ノ點ヲ查察スルヨリモ一層困難ナリ第一
 ノ點ハ單ニ法律自ラチ錯誤シタルニ在レドモ第二ノ點ハ
 法律ヲ適用スルニ先チ審理認定スル事實ノ認定ヲ法律

ニ違背シテナシタルニ在レハ之ヲ吟味シテ果シテ其審理
 制定ガ法律ニ違背シタリヤ否ヲ定ムルニハ頗フル緻密ノ
 考察ヲ要セサル可ラサレハナリ
 第二ノ點ハ法律ニ違背シテ事實ヲ審理制定シ若クハ審理
 制定セス又ハ審理制定ス可キ事實ノ審理制定ヲ怠リ又ハ
 當事者ノ請求セサル事實ヲ請求シタリト看做シ之ヲ論點
 事實ニ編入スル如キ要スルニ法律規則ニ違背シテ事實ノ
 認定ヲ爲シタルヲ云フ抑モ法律規則ニ違背シテ事實ノ認
 定ヲ爲ストハ如何ナル場合ヲ指スカ請フ試ミニ之レカ討
 究ニ從事セン
 讀者ハ定メシ記憶スルナラン余ガ曩キニ證據ヲ論スルニ
 際シ推測ノ種類ヲ論述シタルヲ即チ法律上確定ノ推測法

律上不確定ノ推測事實上堅強ノ推測事實上薄弱ノ推測是ナリ而シテ余ハ今第二ノ點ノ討究ニ當リ再ヒ此等推測ヲ分析解剖スルノ必要ヲ感スル場合ニ際會セリ即チ法律規則ニ違背シテ事實ノ認定ヲ爲ストハ多クハ法律上不確定ノ推測テ誤リタルニ職由セスンハアラス何トナレハ法律上確定ノ推測ハ既ニ一種ノ法律規則ナレハ之ヲ錯誤スルハ即チ既ニ法律適用ヲ誤リタルモノニシテ第一ノ點ニ歸セサルヲ得ス又事實上ノ推測ハ其堅強事實ト薄弱事實ナルニ關セス之ヲ認定スル上ニ於テ法律ノ之ヲ束縛ス可キモノナク一ニ裁判官カ自由ニアレハ之ヲ錯誤スルモ法律規則ニ違背シタル事實ノ認定ニ非サルヲ以テ上告ノ理由トナス可ラサレハナリ然ルニ法律上不確定ノ推測ハ法律

上確定推測ノ如ク一種ノ法律規則ト迄進ミタルモノニ非ラス又事實上ノ推測ノ如ク之ヲ裁判官ノ自由ニ一任スルモノニモアラス即チ反證ノ證アラサル限りハ此事實ニ就テハ如此ク推測ス可シ彼ノ事實ニ於テハ如此ク推測ス可シト命令シタル推測方法ニシテ之ヲ不確定ノ推測ト云フ所以ノモノハ反對證據ヲ舉テ推測ヲ變更スルヲ得ルニ因ル是レ即チ法律ノ嚴命スル所ニシテ裁判官ハ謹ンテ此一應推測ヲ遵奉セサル可ラス然ルニ裁判官若シモ法律上不確定ノ推測ヲ下ス可キ事實ナルニモ關セス進ンテ法律上確定ノ推測ヲ爲スカ又ハ退テ事實上ノ推測ヲナシ其良心ニ從テ自由ナル認定ヲ下シタリトセンカ是レ即チ法律ニ違背シテ事實ヲ審理認定シ若クハ審理認定セサルナリ

例へハ占有ハ所有ヲ推測ストハ法律上不確定ノ推測ナレ
 ハ茲ニ占有上ニ就キ訴訟アリト假定セヨ該占有ノ推測ヲ
 變更スルニハ其占有ヨリ一層優等ナル占有ノ事實アルカ
 又所有權アルヲ證據立テタル上ニ非サレハ法律上不確
 定ノ推測ヲ保守セサル可ラサルニ當該裁判官ハ現占有ニ
 對シ別ニ優等占有又ハ所有權ヲ證明スル事實アルニモ關
 セス擅ニ自己ノ臆斷ヲ以テ此法律不確定ノ推測ヲ遵奉セ
 サリシナラハ該認定ハ法律ニ違背シタルモノナルヲ以テ
 上告ノ理由トナスヲ得ルガ如シ又子女拐帶訴訟事件ニ
 就テハ父母ガ奉養ヲ欠キタル點ヲ以テスルニ非サレハ民
 事訴訟ヲ提起シ得可ラサルニ裁判官ハ唯子女拐帶ノ點ノ
 ミヲ審理シ毫モ奉養ノ點ニ付キ審理セサルニモ拘ハラズ

シテ損害要償ヲ申渡ス如キハ審理認定ス可キ事實ノ審理
 認定ヲ怠リタルモノニシテ即チ奉養ヲ欠キタリトノ一應
 推測ヲ下ス可キ規則ノ適用ヲ怠リタルモノナリ
 凡ソ大審院上告ノ部分ニ於テ最モ多ク且最モ困難ナルハ
 第二ノ點ノ討究ニ如クハナシ此事實ニ於ケル彼ノ認定ハ
 法律上不確定ノ推測ヲ下ス可キ性質ノモノナルヤ彼ノ認
 定ニ於ケル此ノ事實ハ單ニ事實上ノ推測ニ止リ之ヲ認定
 スルハ一ニ裁判官ノ自由權内ニアリ得可キ性質ノモノナ
 ルヤ法律上不確定ノ推測ト事實上ノ推測トハ一葦帶水ヲ
 隔ツルニ過キスト雖一ハ上告ノ理由トナルモ一ハ上告
 ノ理由トナルヲ得ス上告ノ理由トナリ得可ラサル事實
 ノ認定ヲ以テ嗚呼ク間敷モ之ヲ以テ裁判官ノ越權抔ト稱

酒々數百言
筆ニ從テ論
下ス立論正
確ニシテ割
切又微密

シ旨蛇ニ上告ヲ爲スモノ、如キハ未タ事實認定ニ法律上ノ推測ト事實上ノ推測アルトナ知ラサルニ坐スルモノナリ彼ノ手續上ニ於テ法律違背ト爲ス場合ノ如キハ少シシ法律思想アルモノハ容易ニ其上告ノ理由トナリ得可キヲ發見スルヲ得可シ(即チ第四百三十六條ノ各項)ト雖凡第二ノ點ノ疑問ニ就テ實際上能ク之ヲ鑑別スル(法律上不確定ノ推測ト事實上ノ推測)ハ明法家ト雖凡亦タ難シトスル所ナリ夫レ然リ然リト雖凡能ク此原理ノ存在ヲ咀嚼シテ之ヲ事實ニ應用セハ蓋シ其過チ寡キニ庶幾カラシ彼ノ知レキツタル管轄違等ノ各場合ノ上告ニ於テ其言分立ナタレハトテ曷ソ之ヲ多トスルニ足ラシヤ

第二ノ點ニ於テ猶ホ討究ス可キハ訴點ヲ審理認定スルヲ

ヲ過マルヲ是ナリ訴點ノ審理認定ヲ過マルヲナ區別シテ左ノ二トス

第一一方ノ是認シ一方ノ非認スル訴點ヲ審理認定スルヲ

ヲ錯誤シ却テ他ノ點ニ於テ判決ヲ下スヲ

第二ハ請求セサル事實ヲ請求シタリト看做シ之ヲ訴點ト

爲シテ判決ヲ下スヲ

第一第二ノ重要ナル區別ハ當事者ノ申立タル陳述中ニ就

キ訴點ヲ過ルト申立テサル陳述ヲ申立テタル陳述ト爲シ

テ訴點ヲ過ルトニ在リ

凡ソ訴訟審理ノ大眼目ハ訴點ノ所在ヲ探求スルニ在リテ

必スシモ其事實ノ大小關係盡ク遺ナク漏ナク申立テシム

ルニ非ラス畢竟事實ヲ申立テシムルハ訴點ヲ明白ニスル

ガ爲メナリ訴點既ニ明白ナレハ區々ノ關係瑣々ノ事實亦
 タ之ヲ問フノ煩勞ヲ取ルヲ要セスシテ理非明白之ヲ批難
 ス可キ餘地ナキナリ(即チ上訴ノ點ナシ)然ルニ拙劣ナル裁
 判官ハ一方ノ是認シ一方ノ非認スル論點ノ所在ヲ發見ス
 ルヲ爲サスシテソザ々事實ヲ申立テシメ又ハ無關係
 事實迄モ立證セシムルヲ以テ空漠タル事實ノ海ニ彷徨シ
 訴點ノ所在ヲ失フモノ多シ即チ訴點ヲ定ムルニ原告ノ請
 求ハ當チ得タルヤ否ニ在リ(他ニ猶適當ノ辞アルニ)杯ト漢
 然タル訴點ノ制定ヲ爲シテ常ニ屢々破毀サル、如キハ即
 チ一方ノ是認シ一方ノ非認スル訴點事實ニ向ハスシテ却
 テ他ノ點ニ向テ訴點ヲ定ムルガ故ナリ例ヘハ私犯的ヲ以
 テ訴點ノ要旨ト爲シタルニ裁判官ハ契約的ヲ以テ他ノ訴

點ヲ定ムルキノ如シ是レ即チ第一點ノ場合ナリ
 請求セサル事實ハ訴ヲ受ケサル事實ナリ訴ヲ受ケサル事
 實ニ向テ判決ヲ下スハ訴ヘサレハ理セスノ原則ヲ破ルモ
 ノニシテ即チ民事ノ裁判ハ唯之ヲ聞クニ在リノ法理ニ背
 戻ス法律違背ニ非ラスシテ何ソヤ例ヘハ月賦證書ニ「若シ
 一ヶ月ニテモ滞ルキハ一時請求サル、モ苦シカラス」ノ條
 件ハアルモ原告ハ此ノ條件付キノ權利ヲ主張セスシテ唯
 滞リシ丈ノ月賦金ヲ請求セシニ裁判官ハ一時皆濟ヲ言渡
 シタルキノ如シ是レ第二點ノ場合ナリ
 法律違背ノ主點ハ以上ノ説明ニ於テ充分論述シタリト信
 スレモ余ハ猶第四百三十六條第七項即チ裁判ニ理由ヲ付
 セサルキノ一項丈ヲ討究セントス何トナレハ此項ハ他ノ

諸項ト違ヒ大ニ考察ヲ要ス可キモノナレハナリ

「裁判ニ理由ヲ付セサル」ノ場合ヲ區別シテ左ノ二點トス

第一理由ヲ欠キタル

第二理由ノ不備ナル

余ハ此二點ヲ論スルニ先タテ所謂ユル裁判トハ如何ナル
モノナルヤヲ吟味スルハ甚ダ必要ノコトナリト信ス抑モ
玆ニ言フ所ノ裁判トハ即チ一方ノ是認スル所一方ノ非認
スル所ノ訴點及其訴點ヲ確ムルニ必要ナル主タル事實若
クハ從タル事實ノ陳述及ヒ直接證據若クハ間接證據ノ證
明ニ向テ盡ク其効無効及取捨ノ關係ヲ示シ以テ訴點ノ是
非曲直ヲ判斷シタルモノ即チ判決文中ノ眼目ヲ言フナリ
而シテ玆ニ一チ欠ク即チ裁判ニ理由ヲ付セサルモノトナ

ル例ヘハ當事者ガ證明シタル中唯一ノ從タル事實ト雖ト
モ其事實ハ何故ニ効力ヲ有スルニ足ラストノ理由ヲ付セ
サレハ即チ理由ヲ欠キタルモノトナル之ヲ第一ノ場合ト
ス而シテ其事實及證據ノ關係ニ付キ一々其理由ヲ付ス可
キニ或ハ其理由ヲ半示シテ半示セサル如キハ第二ノ場合
即チ理由ノ不備ナルモノナリ玆ニ注意ス可キハ訴點ニ關
係ナキ事實及證據ナリ斯ル事實及證據ハ唯之ヲ採用スル
限リニ非ラス等ノ語ヲ以テ斷然之ヲ排斥シテ願スシテ可
ナリ決シテ何故ニ之ヲ採用スルコトヲ得サルヤノ理由ヲ
付スルニ及ハサルナリ何トナレハ毫モ判決主文ヲ組織ス
ル一分子ニモ非サレハナリ故ニ訴點ニ關係ナキ事實及證
據ハ設令ヒ公正證書ナルニモセヨ之レニ理由ヲ付セサレ

ハトテ決シテ上告ノ理由トナスコトヲ得サルナリ猶茲ニ
 注意ヲ乞ハントスルハ裁判ニ理由ヲ付セサルトキノ或ル
 場合ノ結果ト彼ノ法律上不確定ノ推測ニ違背シタルトキ
 ノ結果トハ均シク上告ノ理由ナレトモ其趣ヲ異ニセリ法
 律上不確定ノ推測ヲ爲ス可キニ之ヲ爲サ、レハ即チ不當
 ニ事實ヲ認定シタル點ヲ以テ破毀ノ理由トナルニアレハ
 事實上ノ推測ニ就テハ毫モ顧ミル所ナシ然ルニ裁判ニ理
 由ヲ付セサルトキノ或ル場合ハ法律上不確定ノ推測ハ勿
 論事實上ノ推測ニ係ル事實ト雖苟クモ訴點若クハ訴點ニ
 關係アル事實ナレハ其効無効取捨ノ理由ヲ付セサル可ラ
 サレハナリ
 以上論述シタル法律違背ノ點アルキハ上告裁判所ハ之ヲ

受理審判スルモノナリ然レモ上告裁判所ハ上告者ノ申立
 テタル點ノ外ハ之ヲ調査セス而シテ之ヲ調査スルニ付テ
 モ又控訴裁判カ其裁判ノ憑據トシタル事實及第四百三十
 八條第三項ニ掲ケタル事實ヲ斟酌スルノ外ニ涉リテ干涉
 ナ試ムルコトヲ爲サ、ルナリ而シテ上告裁判所ハ其理由ア
 リトスルキハ之ヲ破毀シテ他ノ裁判所へ移シ更ニ裁判ヲ
 受ケシムルヲ本色トス即チ大審院ニ於テハ之ヲ他ノ控訴
 院へ移シ控訴裁判所カ上告裁判所ナルキハ之ヲ他ノ地方
 裁判所へ移ス如キ是ナリ然レモ上告裁判所自ラ進ンテ裁
 判ヲ爲スコトアリ余ハ第四百五十一條ヲ朗讀シテ止マント
 欲ス曰ク

上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付裁判ヲ爲ス可シ

第一確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲ニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルキ

第二無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲メニ判決ヲ破毀スルキ

又上告裁判所ハ原裁判ガ其重要ナル點ニ於テ正當ノ理由アルキハ他ノ理由ガ法律ニ違背スルモ之ヲ破毀セサルナリ(第四百五十三條)箇ハ實際ノ便益ヲ慮リテナリ何トナレハ本案ノ裁判ハ適當ナルニモ關セス唯ニ手續上ノ法則違背ノ如キモ猶ホ之ヲ破毀シテ他ノ裁判所ニ移ス可キモノト爲スルハ無用ノ繁雜ヲ徠スノミニシテ毫モ事ニ害ナキヲ以テ上告ヲ棄却スルモノト規定セシ所以ナリ

第三章

抗告

抗告モ控訴上告ト均シク一ノ上訴ナレバ控訴上告ノ如ク重要ナル點ニ於テ破毀ヲ求ムルニアラスシテ法律ニ於テ特ニ規定シタル場合(第四百五十五條)抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限り之ヲ爲スヲ得ニ於テ原裁判ヲ攻撃スル一ノ手續ナレバ之レガ規定モ亦極メテ簡便ヲ旨トセリ要スルニ控訴ノ理由トナラサル幼稚ノ理由ニシテ即チ本案ノ訴點ニ利害ヲ及ホサル所ノ一ツノ決定命令ニ對シテ不服ヲ申立ツルモノトス抗告ハ總テ直近ノ上級裁判所之ガ裁判ヲ爲セハ區裁判所

ニ就テハ地方裁判所地方裁判所ニ就テハ控訴院控訴院ニ就テハ大審院トス而シテ大審院ニ至テハ最高等法衙ニシテ他ニ之レヨリ貴重ナル法衙ナキヲ以テ大審院ガ爲セル決定命令ニ對シテハ第四百六十五條第一項ノ場合ヲ適用スルヲ許サス又抗告ハ抗告裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ對シテ再ヒ猶直近上級ノ裁判所ニ抗告スルヲ許サズルヲ以テ原則トス然レモ抗告裁判所ニ於テ爲シタル決定命令ガ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキハ更ニ猶他ノ直近上級裁判所ニ抗告ヲ爲シ得ルハ固ヨリ其所ナリ(第四百六十五條第二項參觀)

抗告ハ之ヲ區別シテ左ノ四種トス

第一 通常抗告

第二 即時抗告

第三 書面抗告

第四 口頭抗告

第一 第二ハ事件ノ性質ノ異ナルニ從テ此區別ヲ生シ第三第四ハ事件ノ輕微又ハ人ノ性質ノ異ナルニ因テ此區別ヲ生ス即チ通常抗告ハ抗告ニ於ケル一般ノ期限内ニ於テ自由ニ之ヲ爲スヲ得ルモ即時抗告ハ事件急迫ニ屬スルモノナルヲ以テ七日ノ不變期限内ニ之ヲ爲ス可キモノトス而シテ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マル就中闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテノ即時抗告(第二百五十三條)又ハ競落ノ許否ニ付テノ決定ニ因リ損失ヲ被ムル可キ場合ニ於テノ即時抗告又ハ此等競落ヲ許ス可キ理由ナキヲ又

ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許ス可キヲ主張スルニ於テノ即時抗告(第六百八十條)又ハ除權判決ノ申立ヲ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制限又ハ留保ニ對シテノ即時抗告(第七百六十九條)ハ猶一層嚴格ニシテ裁判ノ言渡ヨリ起算スルモノトス書面抗告ハ通常抗告ニモ之ヲ用ユ然レモ之ヲ提出スル所ノ裁判所ヲ異ニス即チ通常抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ爲ス可キモノトス然レトモ即時抗告ハ直チニ抗告裁判所へ提出ス可キモノトス其理由ハ通常抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキ不服ノ點ヲ更正シ抗告者ニ満足ヲ與フ可ケレハナリ

然ルニ口頭抗告モ通常並ニ即時抗告ニ之ヲ用ユルコトヲ得ルモ其事件ハ輕微ノモノタルカ若クハ或ル他ノ場合ノ人ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ許サズ即チ訴訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ管テ繫屬シタルトキ又ハ證人鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出スル義務アリト宣告ヲ受ケタル第三者ナラサル可ラス(第四百五十七條參觀)要スルニ通常抗告ニハ書面抗告口頭抗告ノ兩者アリ即時抗告モ亦然リ書面抗告ニモ通常抗告即時抗告アリ口頭抗告モ亦然リ一括シテ之ヲ言ヘハ一ハ抗告ヲ爲ス裁判所ヲ異ニスルト一ハ書面ヲ用ユルト否ラサルトノ區別アルノミ讀者宜ク其關係ヲ詳ニシテ可ナリ

茲ニ注意ス可キハ即時抗告ナリ即時抗告ハ非常抗告ナリ

其事件急迫ヲ要スルキニ限ル故ニ抗告裁判所ニ於テ其事
 件ヲ急迫ナラスト認ムルキハ原裁判所ニ其事件ヲ送付ス
 ルヲ是ナリ茲ニ至テハ該抗告ハ即時抗告ノ性質ナキモノ
 ナルヲ以テ猶ホ抗告ヲ爲サントスルニハ第四百五十七條
 及第四百五十九條ノ規定ニ依リ通常抗告ヲ爲ス可キモノ
 トス
 控訴ハ一般ニ執行停止ノ効力アリト雖モ抗告ハ特ニ別段
 ノ規定ヲ設ケタル場合ニ非サレハ一般ニ其効ナキモノト
 ス即チ特別ノ規定トハ第六百八十條ノ各場合等トス然レ
 モ原裁判所又ハ裁判長ハ事宜ニ依リテ抗告ニ付テノ裁判
 アル迄抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ
 申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命スルヲ得(第四百六

十條第二項第三項)

審理

抗告審理ハ口頭ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ通則ト爲ス何ト
 ナレハ抗告ハ其事實單簡ニシテ鄭重ナル攻撃辯護方法ニ
 因ルノ必要ナケレバナリ故ニ抗告人ノ反對ノ地位ニ立ツ
 モノト雖モ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ベキ場合ニハ亦口頭
 ヲ以テ之ヲ爲スヲ許ルシ必スシモ書面上(此場合ハ書面
 上ノ陳述ヲ爲スヲ通則ト爲セモ)ノ陳述ヲ要セサルナリ然
 レモ裁判官ニ於テ口頭辯論ヲ要スルニ非サレハ抗告事實
 ノ審理ヲ盡ス能ハスト思量スルキハ當事者ヲ召喚シテ口
 頭辯論ヲ爲サシムレモ簡ハ抗告ニ於テ常ニ有リ勝ノ事件
 ニ非サル可シ

而シテ右抗告裁判ヲ爲スニ先クテ抗告裁判所ハ左ノ要件ヲ調査セサル可ラス

(一)抗告ハ抗告ヲ許ス可キ原由アルヤ否

(二)法律上ノ方式ニ從ヒタルヤ否

(三)抗告ヲ爲シ得可キ期間ニ提出シタルヤ否

以上三要件悉ク具備スルキハ之ヲ適法ニ提出セラレタリト云フ而シテ抗告裁判所ハ右抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルキハ原裁判所ノ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ事宜ニ因リ原裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトアル可シ而シテ抗告裁判所自ラ裁判ヲ爲スルハ其旨ヲ原裁判所又ハ裁判所長ニ通知セサル可ラス何トナレハ不服ヲ申立テラレタル原裁判所ハ抗告裁判所ガ下シタル裁判ノ旨趣ヲ違奉シ更ニ適正ノ裁判ヲ爲サル可ラサル義務アレバナリ(第四百六十二條第四百六十三條第四百六十四條參觀)

終リニ臨ンテ一言ス可キハ處分ノ變更ヲ受訴裁判所ニ求ムルコト是ナリ抑モ受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ニ付キ變更ヲ求ムルハ決シテ抗告ト云フコトヲ得ス然レモ一步進ンテ受訴裁判所カ其變更請求ニ對シテ下シタル裁判ガ不服ナルキハ即チ抗告ト爲ルコト是ナリ何トナレハ受訴裁判所ガ此時ノ裁判ハ決定命令ナレハナリ

第八編

再審

再審ハ實ニ訴訟ニ於ケル非常法ニシテ容易ニ之ヲ許ス可

キモノニ非サルナリ何トナレハ一事不再審ハ訴訟ニ於ケル大原則ナレハナリ若シソレ同一事件ニシテ確定セズ再ヒ之ガ審理ヲ許ストセハ是レ自ラ築キテ自ラ壞ルモノニシテ司法權ノ鞏固裁判ノ威信ハ果シテ安クニ在ルヤ且ツ夫レ權利伸長ノ道ニハ控訴アリ上告アリ抗告アリ如此クニシテ裁判確定ス而ルニ猶何ヲ苦ンテカ更ニ再審ノ途ヲ柘クナ要センヤ抑モ再審ヲ許ス所以ノモノハ已ムヲ得サルニ規定シタル已ムヲ得サル一方法ニシテ若此ノ道ナキハ是非曲直顛倒シテ良民永ク冤枉ノ淵ニ呻吟セサルヲ得サルニ因ル何トナレハ裁判ト雖モ人間ノ下シタル裁判ニシテ不正誤謬ナシトスルヲ得サレハナリ而シテ不正誤謬ノ顯著ナルニモ拘ハラズ猶ホ一事不再審ノ原則ヲ執

再審ノ場合
ハ著者尙筆
ナリ著者ノ
貴筆リ著者
健筆之方著
ム惜シチ惜

拗セハ是法律ハ保權ノ良器ニ非スシテ却テ之ヲ賊スルノ惡機ト云ハサル可ラス此ノ場合ニ至テモ猶ホ再審ハ之ヲ許ス可ラスト云フヲ得可キヤ格言ニ曰ク訴訟ハ最後ノ判決ヲ與ヘサル可ラス司法ノ誤謬ハ之ヲ匡正セサル可ラスト是レ訴訟ニ就テ須臾モ遺忘ス可ラサル至言ニシテ而シテ國家特ニ再審ノ一血路ヲ開クモ亦此ノ旨趣ヲ遵奉履行セシニ外ナラサルナリ夫レ然リ然レモ再審ハ非常法ナリ容易ニ許ス可キニ非ラス余ハ以下再審ハ如何ナル場合ニ於テ之ヲ許ス可キカヲ觀察セントス
再審ノ訴ハ之ヲ區別シテ二トス一ニ曰ク取消ノ訴二ニ曰ク原狀回復ノ訴是ナリ
取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルヲ得ル場合ハ即チ左ノ如

シ(第四百六十八條)

第一規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシキ
 第二法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除席セラレタル判事カ
 裁判ニ參與シタルキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除席
 ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシキハ此限ニ在ラス
 第三判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認め
 ラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタリシキ
 第四訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從
 ヒ代理セラレザリシキ
 第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以
 テ取消シ得ヘカリシキハ取消ノ訴ヲ許サス
 這ハ第四百三十六條上告ノ部ニ既ニ掲ケタリ且余ハ既ニ

其意義ヲ略解シタルヲ以テ再ヒ茲ニ贅セス而シテ第一號
 及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ爲シ得ヘキ場
 合ニ之ヲ爲サ、リシハ即チ取消ノ權利ヲ拋棄シテ其裁判
 ニ服從シタリト推測スルニ足ルヲ以テ再審ノ訴ヲ求ムル
 ヲ許サス

原狀回復ノ訴ヲ爲シ得ル場合ハ左ノ如シ(第四百六十九條)

- 第一刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴
 訟ニ關シ犯シタル判事カ裁判ニ參與シタリシキ
- 第二原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人
 又ハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人
 カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシキ
- 第三判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシ

片

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ
 憑據トナリタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシキ
 第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト
 爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレ
 タリシキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ
 前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申
 立テラレタル判決ト牴觸スルキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スル
 了ヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲
 ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタル

片

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ
 付テ判決カ確定ト爲リタルキ又ハ證據欠缺外ナル理由
 ナ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルキ
 ニ限り再審ヲ求ムルヲ得

天皇ノ御名

ニ於テ司法權ヲ司ル裁判ニシテ聞モ忌ハシキ収賄罪ヲ犯
 シタル裁判官カ裁判ニ參與シタルキハ其不當ノ裁判ヲ下
 セシキハ勿論假令ヒ其裁判ハ適當ナルモ其裁判ハ再審ニ
 付シ之ヲ公正ニ復セシメサル可ラス何トナレハ裁判ノ神
 聖ヲ害スレハナリ是レ第一號ノ場合ナリ

第二號第三號第四號ハ刑辟ニ觸ル可キ曲事ヲ訴訟ニ就テ

之ヲ爲シ以テ審理ノ公正ヲ害シタルヲ云フ即チ法律上代理人若クハ訴訟代理人ガ訴訟ニ關シテ曲事ヲ爲シタルモ又ハ判決ノ憑據ト爲リタル證書ヲ詐僞若クハ變造ニ係リシキ或ハ證人鑑定人又ハ通事ガ僞證ノ罪ヲ犯シ以テ裁判官ガ審理ヲ誤ラシメタルモ是ナリ之ヲ要スルニ第一號乃至第四號ハ直チニ再審ヲ訴フルコトヲ許サザルハ前文但書ニ明言スル如ク此等曲事ニ付テ刑事上ノ判決ヲ確定ト爲リタルモ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ得サリシキニ非サレバ再審ノ訴ヲ求ムルコトヲ得ス

第五號ハ他ノ語ヲ以テ之ヲ言ヘハ刑事裁判所ノ判決ニ基キ判決アリタル場合ニシテ其刑事ノ判決ヲ取消タル他ノ

判決確定シタルモ云ヒ第六號ハ原被告ノ一方判決アリタル事件ニ付キ其前既ニ言渡サレ且確定シタル判決ニシテ其自己ノ利益トナルヘキモノヲ判決確定後ニ發見シ若クハ之ヲ使用シ得ルモ云フ而シテ第七號ハ原被告ノ一方ノ證書ニシテ自己ノ利益トナルヘキ裁判ヲ與ヘシムヘキモノヲ判決確定後ニ發見シ若クハ之ヲ使用シ得ルモ云フ第五號以下ハ獨乙訴訟法ヲ假リテ對照シタル辭ニシテ著者ノ意ハ讀者ヲシテ其因ル所ヲ知ラシメントスルニ在リ而シテ原狀回復ノ訴ハ原被告其過失ナク原狀回復ノ原因ヲ前訴訟ニ於テ特ニ故障控訴若クハ附帶控訴ニ依リ提出シ得サリシキニ限り許スモノトス抑モ取消ノ訴ト原狀回復ノ訴ガ同時ニ同一ノ原被告若ク

ハ異ナル原被告ヨリ爲サレタルキハ第四百五十九條ノ規定ニ從ヒ原狀回復ノ訴ニ付テノ辨論及裁判ハ取消ノ訴ニ付テ裁判カ確定スル迄其審判ヲ中止セサル可ラス
 取消訴訟及原狀回復訴訟ハ其訴訟ニ係ル判決ヲ言渡シタル裁判所即チ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス而シテ同一ノ事件ニ付キ數個ノ判決ニ對シ一分ハ下級裁判所又一分ハ上級裁判所ニ於テ言渡サレタルキハ上級裁判所ノ管轄ニ專屬ス又取消訴訟若クハ原狀回復訴訟ニシテ督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對スルキハ其命令書ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レモ此ノ場合ハ區裁判所ノ命令書ニ對シ異儀ノ申立アリタル場合ニ於テ猶區裁判所カ本案ノ審理

ヲ爲スノ權ヲ有スルキニ限レリ(第四百七十二條觀)
 取消訴訟及原狀回復訴訟共第四百七十四條規定ノ如ク原被告ハ再審ヲ求メ得可キ不服ノ原由ヲ知り得タル時ヨリ起算シ一ヶ月ノ不變期限内ニ訴ヲ起ス可キモノトス而シテ茲ニ注意ス可キハ假令原被告ハ不服ノ原由ヲ知りタルニモセヨ其期限ハ確定前ニ始マテサルモノトス又假令原被告ハ不服ノ原由ヲ知り得タルモ判決確定ヨリ五年ヲ經過シタルキハ訴ヲ起スヲ許サス但シ第四百六十八條第四號ノ如キ代理ノ欠漏アルカ爲メ取消訴訟ヲ爲ス場合ハ例外ナリトス此場合ニ於テハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ判決書ノ送達アリタル時ヨリ五ヶ年ノ滿了ヲ起算ス可キモノトス

審理

再審々理ニ二アリ

(一)本案前ノ審理

(二)本案ノ審理

本案前ノ審理トハ第四百七十六條及第四百七十七條ニ因リ即チ其訴ハ正當ナルヤ否又之ヲ受理ス可キモノナルヤ否ヲ調査シ再審ヲ求ムル理由及許否ニ付辯論及裁判ヲ爲ス。是ナリ本案ノ審理ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限リ辯論及裁判ヲ爲スヘキモノトス而シテ本案前ノ審理モ合併シテ同時ニ之ヲ審理スルヲ通常トスレモ裁判所ノ異見ニ因リテハ第四百七十九條第二項ニ依リ先ツ本案前ノ審理ニ就キ辯論及裁判ヲ爲ス可シ此場合ニ於テ再審ヲ

許容シタル裁判アリタルトキハ本案ニ付テノ辯論ハ前辯論ノ續行ト看做シ且再審ヲ許容シタル裁判ヲ中間判決ト看做シ之ニ對シ獨立ノ上訴ヲ許サバモノトス若シ又本案ニ於テ再審ニ係ル原判決ヲ不當ナリト認ムルキハ之ヲ取消シ更ニ本案ノ終局判決ヲ爲ス可シ不受理ヲ言渡シタル場合及ヒ原判決ヲ取消シ更ニ判決ヲ爲シタル場合ニ於テハ此等ノ判決ニ對シ通常ノ規則ニ循ヒ上訴ヲ爲ス。得(第四百八十一條)

第九編

強制執行

總論

百川縱橫或ハ左シ或ハ右ス而シテ其朝スル所ハ一ニ東海ニ

鋤鏟銜艾秀
ナ去リ積チ
除ク期スル
トコハタ
イ粒々ノ美
果也論ノ攻
學也論ノ攻
口也論ノ攻
實也論ノ攻
局也論ノ攻
直也論ノ攻
是也論ノ攻
認也論ノ攻
ラ也論ノ攻
ハ也論ノ攻
執也論ノ攻
者也論ノ攻
目也論ノ攻
以也論ノ攻
謂也論ノ攻
證也論ノ攻

在リ訴訟モ亦然リ辨難攻撃力ヲ權義ノ確認ニ盡スモ歸ス
ル所ハ唯實行ノ一點ニ止ル準備書面ト云ヒ口頭辯論ト云
ヒ故障ナリ異義ナリ或ハ上訴トナリ或ハ再審トナルモ當
事者最終ノ目的ハ唯其實行ヲ得ルニ在リ若シ夫レ訴訟ニ
シテ實行サレ得ザリシモノトセハ權利モ義務モ贅瘤ノミ
堂々タル裁判所亦案山子ト同一ナランノミ故ニ強制執行
ハ訴訟ノ畫龍點睛ニシテ之アリテ訴訟ノ首尾全体始メテ
其生色ヲ顯スモノト云フ可シ夫レ然リ訴訟ハ實行ナル制
裁アリテコソ始メテ訴訟ノ効用ヲ見ルノミナラ
ス法律ノ法律タル價值モ此ニ因リテ始メテ其實益ヲ示ス
ニ足ル否ラスンハ金科玉條ノ法律モ亦タ是レ書生ノ空論
ト其伍ヲ同フス可キノミ抑モ訴訟法ヲ研究スルノ要ハ理

論ノ探求ヨリモ寧ロ實際上ノ應用如何ヲ願ミルニ在リ而
シテ此編ノ如キハ最モ心ヲ茲ニ留スンハアル可ラサルナ
リ
實行ハ如何ナル時期ニ發生スルカ曰フ實行ハ權利義務ヲ
確認セラレタル時ニ發生ス而シテ其確認ハ之ヲ區別シテ
二トス
(一)確定ノ終局判決ニ因テ實行權發生ス
(二)假執行ノ宣言ヲ附シタル終局判決ニ因テ實行權發生
ス

確認トハ裁判所ノ判決カ即チ權利義務ノ確認ナレハ判決
サヘアレハ茲ニ實行權發生ス可キニ似タレモ法律ハ權利
確定ノ制度ヲ設クルヲ以テ第一審判決ナレハ確定時期到

達迄第二審ナレハ其判決アル迄ハ權利確定セサルモノト
ス故ニ確定制度ノ點ヨリシテ之ヲ觀レハ確定セサル判決
ハ未タ權利ノ確認セラレタルモノト云フコトヲ得ス是レ(二)
ノ點ニ付キ特ニ假執行ノ宣言ニ附シタル終局判決ヲ要ス
トアル所以ナリ故ニ法律ノ規定ニ從テ之ヲ區別セハ

(一)ハ本執行

(二)ハ假執行

以下之ヲ詳論セン

本執行ハ判決確定スレハ如何ナル場合ニテモ執行ヲ爲ス
コトヲ得而シテ之ヲ爲スニハ第四百九十八條第一項及第二
項ニ抵觸セサル以上ハ裁判確定ノ證明書ニ因リ執行力ア
ル正本ニ因テ強制執行ヲ遂クルコトヲ得本執行ハ或ル特別

ノ場合ニ非サレハ強制執行ノ權力ヲ停止若クハ取消サル
、コトナシ(第五百條第五百十四條第五百拾五條第五百廿九
條第五百三拾條第五百五拾條等參觀)而シテ又本執行ハ判
決確定ニ非サルモ權利ノ成立明確ニシテ之レカ執行ヲ爲
スモ敢テ後害ナキモノト見做シタル場合ニ於テハ亦強制
執行ヲ遂クルコトヲ得セシム是レ執行ニ於ケル特別規定ナ
リ
今之ヲ列擧スレハ

(甲)執行シ得キ判決

是レ第一ノ場合ナリ

(乙)抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ルコトヲ得ル裁判

(丙)執行命令

(丁) 訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解

(戊) 第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シタル和解

(己) 公證人カ其權限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作りタル證書

但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付作りタル證書ニシテ直チニ強制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記載シタルモノニ限ル(第五百五十九條)

(庚) 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之

ヲ取立ツ可シ強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ(第

五百五十四條)

右強制執行ヲ爲スニ付キ茲ニ注意ス可キハ強制執行ノ開始後ニ債務者ノ死亡セルキ及ヒ戶主タル債務者カ其位地ヲ辞シ或ハ其位地ヲ失ヒタル時はナリ執行開始後債務者死亡スルキハ強制執行ハ爲メニ中止セラル、コナクシテ直チニ死亡債務者カ遺産ニ對シ續行スルコトヲ得而シテ死亡債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラサルキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルキハ債務者ハ執行裁判所ニ申立テ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任セラレノコトヲ請求シ以テ其執行ヲ續行スルコト

ナ得茲ニ又戸主タル債務者ガ其位地ヲ辞シ又ハ之ヲ失ヒタルキハ如何ント云フニ債務ノ存スル所ハ其位地ニ在リ位地ハ即チ「ペルソナリヤ」ニシテ債務者ガ位地ヲ辞シ又ハ位地ヲ失フニ關セス當然其義務ヲ負ハサル可ラス是第五百五十三條ノ規定アル所以ナリ
強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テハ停止若クハ制限サル、モノトス即チ左ノ如シ

第一執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三執行ヲ免ル、爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書

第四執行ス可キ判決ノ後ニ債務者ガ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ従前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セサル時ニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シト規定セリ(第五百五十條及第五百五十一條)
假執行ハ如何ナル場合ニ於テ之ヲ爲スヲ得ルカヲ吟味ス可キ時期ニ達セリ假執行ハ裁判所職權ヲ以テ之ヲ爲ス

場合ト債權者ノ申立ニ因テ之ヲ許ス場合ト其他ノ場合アリ以下之ヲ列擧セシ

(甲)職權ヲ以テ假執行ヲ言渡ス場合ハ左ノ如シ

第一認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決

第二證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ闕席判決

第四假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決

但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三ヶ月間

ノ爲ニ支拂フ可キモノナルキニ限ル(第五百一條)

(乙)債權者ノ申立ニ因リ假執行ヲ言渡ス場合ハ左ノ如シ

第一總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取明

渡使用占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若

クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃貸

人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二占有ノミニ係ル訴訟

第三雇主ト雇人トノ間ニ雇期間一ケ年以下ノ契約ニ

關シ起リタル訴訟

第四左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食

店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ

起リタル訴訟

イ賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手

荷物ノ運送料

口 旅店若シハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ
保護ノ爲メ預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第五此他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ
貳拾圓ヲ超過セサル訴訟

但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ
適用ス(第五百二條)

甲ノ場合ハ命令的ニシテ裁判所ハ是非共假執行ノ言渡ヲ
爲サ、ル可ラスト雖モ乙ノ場合ハ隨意的ニシテ假執行ヲ
請求スルト否トハ債權者其人ノ自由ニ任ス而シテ法律カ
一ハ命令的ニ之ヲ執行セシメ一ハ隨意的ニ之ヲ放任シタ
ル理由ヲ釋スルニ畢竟スルニ訴訟ノ性質ノ異ナルニ從テ
保權ノ道ニ輕重ノ別ヲ付シタルニ過キス即チ甲ノ場合ニ

於テハ權利既ニ明確ニシテ錯誤ノ憂ナキモ(第一)又ハ神速
ヲ貴フ商業的ノ權義ニ關スルモ(第二)又ハ之ヲ實行セシメ
サレハ債權者永シ訴訟ノ實益ヲ見ル能ハサルモ(第三)又ハ
特別處分ノ爲メニ正當ノ權利ヲ拘束セラレタルモ(第四)又
ハ生存上ニ欠ク可ラサル供給的ニ關スルモ(第五)ノ如キ皆
ナ執行セシメテ害ナク又執行セサレハ爲メニ權利ヲ傷害
スルハ鮮少ニ非サルヲ以テナリ之ニ反シ乙ノ場合ハ事輕
微ニ屬スルヲ以テ必スシモ第四百九十七條ノ規定ヲ履ム
ヲ要セスシテ假執行ヲ爲スヲ得ト規定シタルハ要スル
ニ訴訟價額ノ寡少ナルト急速ヲ要スル事件ナルニ因リテ
ナリ何トレハ之ヲ執行セシムルモ後日之ヲ救フ可ラサル
程ノ患害ナケレハナリ

(丙)甲乙ノ場合ニ列擧シタル事項ノ外猶左ノ場合ニ於テ

ハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限リ債權者ノ申立
ニ因リテ假執行ヲ宣言ス可シ

第一債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルルキ
第二債權者カ判決ノ確定ト爲ル迄執行ヲ中止セハ償

ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ受ク可キヲ疎明ス
ルキ(第五百三條)

右第一ノ場合ニ對照シテ見ル可キハ即チ債務者カ判決確
定以前ニ甲乙丙ノ各場合ニ因テ假執行セラル、
是ナリ此場合ニ於テハ債務者ハ假執行セラル、
キハ再ヒ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク可キヲ疎明シ
裁判所ヲシテ左ノ宣言ヲ以テ假執行ノ停止若クハ取消ヲ求ムルヲ得

第一第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假リニ執行ス
可ラサルヲ

第二第五百二條第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ
假執行ノ申立ヲ却下スルキ

(丁)判決確定セサルモ債權者豫メ保證ヲ立ツルルキハ總テ
ノ場合ニ於テ假執行ノ宣言ヲ受クルヲ得

然レモ債權者ニシテ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルヲ申
出サルルキハ債務者ノ申請ニ因リ裁判所ハ債務者ニ保
證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ假執行ヲ免ル、
ヲ許ス

抑モ假執行ニ付テノ言渡ハ本案ノ審理ト同時ニ審理シテ
爲ス可キモノナル故ニ假執行ノ判決ヲ申請スル當事者一

方ノ申立ハ口頭辨論ノ終結前ニ之ヲ爲サ、サル可ラス(第
五百六條參觀)又職權ヲ以テ(第五百一條)或ハ申請ニ因テ(第
五百二條乃至第五百四條)假執行ニ付テノ裁判ヲ爲ス可キ
場合ニ於テ若シ其本案裁判ノ判決ニ付シアラサルハ第
二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補
充ヲ求ムルヲ得ルナリ(第五百八條參觀)

第二審裁判所ニ於テハ第一審裁判所ノ判決ニ於テ言渡サ
レ或ハ拒マレタル假執行ニ付キ申立アルハ本案ノ審理
ニ先ヲテ假執行ニ付テノミ辨論及裁判ヲ爲ス可シ而シテ
第二審裁判所ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテ
ハ更ニ不服ヲ申立ツルヲ許サ、ルナリ(第五百十一條參
觀)假執行ヲ付シタル判決ニ對シ故障若クハ上訴アリタル

場合ニ於テ上級裁判所ニ於テ下級裁判所カ爲シタル本案
ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更セラ
レタルハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更セラレタル部分ニ
限リ假執行ハ其判決ノ言渡ト共ニ其効力ヲ失フモノトス
而シテ上級裁判所ハ此ノ言渡ト同時ニ廢棄若クハ破毀又
ハ變更セラレタル部分ニ對シ被告ノ申立ニ因リ先キニ被
告ガ支拂又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キヲ原告ニ言渡
スモノトス

第五百十五條ニ曰ク執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシ
テ之ヲ爲ス可シ云々抑モ第五百十五條ノ執行判決トハ斷
シテ外國裁判所ノ爲シタル判決ヲ指シタルモノナリ何ト
ナレハ或ル却下ノ場合ノ外ハ外國裁判所ノ判決ト雖トモ

之ヲ執行ス可クレハナリ余ハ今マ第五百十五條ノ各項ト
獨乙訴訟法ノ精神トヲ對照シテ讀者ノ參考ニ供セント欲
ス

第一外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタルトヲ證明セカ
ルキ

(獨)外國裁判所ニ於テ爲シタル判決其國ノ現行法ニ循ヒ
未タ確定セサルキ

第二本邦ノ法律ニ依リ爲サシムルトヲ得サル行爲ヲ執
行セシムヘキキ

(獨)執行ヲ爲スニ付テハ執行判決ニ關スル管轄裁判所ノ
邦法ニ循ヒ強制シ得可ラサル行爲ヲ強制セサルベカ
ラサルキ

第三本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサ
ルキ

(獨)內國ノ法律ニ依ルニ外國裁判所ノ管轄ニ屬セス且又
管轄ニ付キ原被告ノ合意ヲ許サ、ル訴件ナルキ

第四敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セザリシキ但訴訟
ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判所々屬ノ國ニ於
テ又ハ法律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セ
カリシキニ限ル

(獨)敗訴シタル義務者外國裁判所ニ於テ提起アリタル訴
訟ニ關シ審理ニ就カサル獨乙人ナルキ然レモ外國ノ
法律ニ依リ訴訟ヲ指揮スヘキ命令若シハ呼出狀ニシ
テ受訴裁判所々在ノ外國ニ於テ本人ニ送達セラレ又

ハ獨乙帝國內ニ於テ法律上ノ補助ニ依リ本人ニ送達
セラレタルキハ此限ニ非ラス

第五國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルキ

(獨)獨乙及ヒ其外國ノ間ニ於テ判決ノ執行ニ付キ相互締
約アラサルキ

應訴セサリシキト云ヒ相互ヲ保セサルキト云ヒ辭ノ調子
ノ上ニ於テ新シク且ツ解シ難キ文字ノ爲メニ分ケモ無キ
所ニ於テモ頗フル考察ヲ要サネハナラヌハ日本新典固有
ノ特色タリ故ニ一ハ學理ニ依リ一ハ其母法タル外國法ニ
依ルニ非サレハ法文ノ真意知リ能ハサルモノ多シ豈ニ獨
リ此編ノミ然リト云ハンヤ
抑モ執行力ノ及フ處ノ區域如何ヲ觀ルニ債權者ハ一箇ノ

地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ
得ル能ハサルキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地
又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス(第
五百二十六條)如此ク執行力ハ其執行ヲ命令シタル裁判所
ノ區域内ニ止マラスシテ數箇ノ裁判所ノ地ニ於テ同時ニ
強制執行ヲ爲シ得ルモノハ如何ント云フニ司法權ナルモ
ノハ主權者ノ名ノ下ニ於テ行フモノナルガ故ニ
天皇ノ御名ニ於テ言渡サレタル裁判々決ノ効力ハ日本帝
國主權ノ及フ處ハ北千嶋ノ極南琉球ノ端ニ至ルモ及ハザ
ル所ナキ所以ナレバナリ是レ第五百二十五條ニ執行力ア
ル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラ
ス總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノトスト規定セシ所以

ナリ夫レ然リ而シテ強制執行ノ實施ハ債權者自ラ爲サス
 シテ執達吏之ヲ爲ス(第五百三十一條參觀)然レモ債權者ガ
 執達吏ヲノ斯權ヲ實施セシムルニ裁判所ノ媒介補助ヲ乞
 フコトナク債權者自ラ直接ニ執達吏ニ委託シテ之ヲ爲サシ
 ムルヲ常トス然ル所以ノモノハ強制執行モ亦「原告自ラ
 直接ニ訴訟ヲ爲ス」ノ原則ニ從ヒタルモノナレハナリ然ラ
 ハ則チ強制執行ノ實施權ハ債權者自ラ之ヲ掌握スルモノ
 ナルカノ疑問ヲ發スルモノモアラソナレモ既ニ第一編ニ
 於テ判斷ト實行トノ二者ハ之ヲ一個私人ニ委任ス可ラズ
 シテ國家ノ備付ケタル司法機關ノ動力ニ依テ回復ヲ計ラ
 サル可ラサルコトヲ詳論セシナレハ讀者ハ之ヲ記憶スルナ
 ラン抑モ訴訟ハ原告自ラ之ヲ爲ストハ判斷ト實行トチ

乞ハソ爲メニ自ラ進ンテ請求スル行爲ノ全体ヲ指稱スル
 モノニシテ自ラ判斷ト實行ヲ爲ス可キモノニ非ラス即チ
 原被告自ラ之ヲ爲サスンハ(訴ヘサレバ)裁判官ハ判斷ヲ與
 ヘス原被告自ラ之ヲ爲サスンハ(委任セサレバ)執達吏ハ執
 行ヲ實施セサルナリ然ラハ則チ強制執行モ亦原被告自ラ
 訴訟ヲ爲スノ原則ニ從ヒタルモノナリトハ決シテ誣言ニ
 非サルヲ首肯スルナル可シ
 抑モ執達吏ナル公吏ヲシテ斯權ヲ實施セシムル利益如何
 チ觀ルニ

- 第一私怨ニ涉ル恐レナキコト
- 第二公平ヲ失スル恐レナキコト
- 第三損害ヲ與フル恐レナキコト

債權者ハ權利ヲ以テ執行シ債務者ハ義務ニ因テ執行サル
 、ナレハ執行シタリトテ執行サレタリトテ唯權利義務ノ
 「ゆきさつ」如何ノミ權利義務ヲ外ニシテ他ニ何等ノ理屈モ
 之レアラサレハ債權者モ心配ナク取ルモノハ取ルベシ債
 務者モ快ク渡スモノハ渡スベキハ理ノ當然ニシテ誠ニ湯
 茶ヲ呑ムカ如キ譯柄ナレモ理由ヨリモ寧ロ感情ニ支配セ
 ラルハ通常人間ノ避ク可ラサル處ニシテ彼ノ「盗みする子
 ハ惡ふなふて繩掛る人が怨めしい」ノ一句能ク有感動物ノ
 心中ヲ穿チタルモノト云フ可シ故ニ原被告ナシテ直接ニ
 執行セシムルキハ權利義務ノ外ニ於テ怨恨ヲ漏ラシ行キ
 掛リノ如何ニ因テ其處置常ニ公平ヲ失フハ數ノ避ク可ラ
 サル處ナリ獨リ之レノミナラス万一執行上債務者ニ損害

此論切著
 者道般ノ文
 字何邊ヨリ
 得來タルカ

世ニ執達吏
 ナ目シテ
 ひつとく
 モト稱スル
 シテ其弊而
 新紙上ニ著
 一々リ此者
 及ハサルハ
 何リヤ

ナ與フルモ債權者ノ如何ニ因テハ或ハ之ヲ辨償シ得サル
 モノアリテ爲メニ債務者ナシテ回復ス可ラサル損害ノ位
 地ニ立タシムルコトアリ然ルニ之ニ反シ執達吏ナシテ斯權
 ナ實施セシムルキハ曩キニ所謂ル唯權利義務ノ「ゆきさつ」
 ノミニ關シ其間ニ情實ノ以テ之ニ介スルモノナケレハ隨
 テ怨恨ニ失シ公平ヲ欠クノ患ナク眞ニ能ク強制執行ノ性
 質ヲ完フスルコトヲ得可シ獨リ之レノミナラス執達吏ハ其
 公務ヲ取扱フ爲メ國家ニ對シ特別義務ヲ負擔シ殊ニ又保
 證金ヲ差入レアレハ万一強制執行ノ爲メ債務者ニ損害ヲ
 與フルコトアルモ彼ノ保證金ヲ以テ其損害ヲ辨償スルコト
 得レバナリ且ツ委任者即チ債權者ノ位地ニ就テ云フモ甚
 マ利益アリ即チ債權者ガ委託シタル執行事件ニ付キ執達

吏其委托事件ニ對シ爲シ若クハ爲サ、ル行爲ヨリシテ又ハ職務上義務ノ違背ヨリシテ損害ヲ加ヘタルキハ債權者ハ充分ニ其損害要償ヲ執達吏ニ對シ追徴スルヲ得レハナリ(第五百三十二條參觀)

執達吏ハ強制執行ヲ爲スニ付キ必要ノ許ス限リハ債務者ノ住居倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カシムル權利ヲ有ス然レモ擅ニ斯權ヲ使用スルキハ執達吏ト雖モ刑法ニ問ハサル可ラス何トナレハ人ノ自由ヲ拘束シ住居ノ安寧ヲ侵害スレハナリ而シテ必要ノ程度ハ實事ノ問題ニシテ今茲ニ其區域ヲ明言シ難シト雖モ要スルニ債務ヲ果サシムルニ欠ク可ラサル緊急事實ナルキニ限ル故ニ債務ヲ果サシムルニ於テ既ニ満足ノ道アル

ニモ關セス進ンテ筐匣ヲ開披シ強テ倉庫ヲ搜索スル如キハ既ニ必要ノ程度ヲ離レタルモノト云フ可シ
執行裁判所ハ第五百四十三條ノ規定ニ從ヒ區裁判所之ヲ管轄ス執行裁判所(區裁判所)ハ執行事件ヲ裁判スルニハ口頭審理ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得而シテ此裁判ハ即時抗告ヲ爲スヲ得ルナリ強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異義ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス執達吏ガ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行々爲テ實施スルヲ拒ミタルキ又ハ執達吏ノ計算セシ手数料ニ付キ異義アルキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スル權ヲ有ス(第五百四十四條)又

第五百四十七條ノ場合ニ於テ急迫ヲ要スルキハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲ニ相當ノ期限ヲ定ム可シ此期限ヲ徒過シタルキハ債權者ノ申立ニヨリ強制執行ヲ續行ス又第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨クル權利ヲ主張スル訴ニ係ルキハ執行裁判所之ヲ管轄ス然レモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス(第五百四十九條參觀)第五百四拾五條及ヒ第五百四拾六條ノ場合ニ於テ異義ノ申立ハ第一審ノ受訴裁判所ニ主張ス可キモノトス而シテ斯ノ異義ノ爲メ特ニ強制執行ノ續行ヲ停止若クハ取消サシメ得ルニハ左ノ事項ノ一ニ適合セサル可テス

第一異義ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト認識セラレタルキ

第二異義ノ爲メ主張シタル事情カ事實上適當ノ説明ナリト認識セラレタルキ

以上ノ事項ノ内少ナクトモ其一ヲ充タサルキハ強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異義ノ訴ノ提起ニヨリテ妨ケラル、コナシ
若シ又以上事項ノ一ヲ充タスキハ受訴裁判所ハ異義者ガ申立ニヨリ判決ヲ爲スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止ス可キ事ヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キ事ヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命ス

ルヲ得而シテ右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又
 急迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲スヲ得而シテ受訴
 裁判所ハ異義ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ右ニ掲ケタ
 ル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若ク
 ハ之ヲ認可スルヲ得又判決中前項ニ掲クル事項ニ限リ
 職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可キモノトス而シテ此裁
 判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス
 以上執行ニ係ル裁判籍ハ專屬ニシテ合意ヲ以テ之ヲ變更
 スルヲ許サ、ルモノトス

第二章

強制執行ノ目的

第一款

金錢ノ支拂ヲ目的トスル強 制執行

強制執行ノ目的ハ大別シテ二トス第一ハ金錢ノ支拂ヲ目
 的トスル強制執行第二ハ金錢ノ支拂ヲ目的トセサルモノ
 トノ二者トス而シテ本款ハ第一ノ場合ヲ詳述セント欲ス
 即チ金錢ノ支拂ヲ目的トスル強制執行ノ目的物ヲ區別シ
 テ左ノ二種トス

(甲) 動產物ニ係ル強制執行

(乙) 不動產物ニ係ル強制執行

余ハ先ツ動產物強制執行ヲ論述セントス
 動產物ヲ區別シテ左ノ二種トス

(一) 有体動產

(二)無体動産(債權及ヒ他ノ財産權)

有体動産中差押ヲ可ラサルモノハ左ノ如シ

第一衣服寢具家具及ヒ厨具但此物ガ債務者及ヒ其家族ノ爲メ飲ク可カラサルトキニ限ル

第二債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一个月間ノ食料及ヒ薪炭

第三技術職工勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上飲ク可カラサル物

第四農業者ニ在テハ其農業上飲ク可カラサル農具家畜肥料及ヒ次ノ収獲マテ農業ヲ續行スル爲メ飲ク可ラサル農産物

第五文武ノ官吏神職僧侶公立私立ノ教育場教師辯護士

公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スル爲メ飲ク可ラサル物並ニ身分相當ノ衣服

第六文武ノ官吏神職僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ニ在テハ第六百十八條ニ規定スル職務上ノ収入又ハ恩給ノ差押ヲ受ケサル金額但差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ日數ニ應シテ之ヲ計算ス

第七藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ飲ク可ラサル器具及ヒ藥品

第八勳章及ヒ名譽ノ證標

第九實印其他職業ニ必要ナル印

第十神體佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物

第十一系譜

第十二債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセザル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル著述ノ稿本

第十三債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

然レモ債務者ノ承諾アルトキハ第三號乃至第八號ニ掲ゲタル物ヲ除クノ外之ヲ差押フルコトヲ得無体動産中差押フ可ラサルモノ左ノ如シ

第一法律上ノ養料

第二債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈惠ニ因リ受クル繼續ノ収入但債務者及ヒ其家族ノ爲メ必要ナルモノニ限ル

第三下士兵卒ノ給料並ニ恩給及其遺族ノ扶助料

第四出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル軍人軍属ノ職務上ノ収入

第五文武ノ官吏神職僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ノ職務上ノ収入恩給及ヒ其遺族ノ扶助料

第六職工勞役者又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル報酬

第一號第五號第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ収入恩給其他ノ収入カ一个年間ニ三百圓ヲ超過スルキハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコトヲ得以下之ヲ分論セン
有体動産ノ差押ハ左ノ如シ

(一)債務者ノ占有中ニ在ル有体動産ハ執達吏自ラ其物ヲ

占有シテ之ヲ保管スルヲ通則トス

(二)有体動産ト雖モ其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困難アルキハ之ヲ債務者ノ保管ニ任シ執達吏之ヲ監督スルモノトス

(三)(一)ノ場合ト雖モ債權者ノ承諾アルキハ執達吏自ラ之ヲ占有セズシテ猶債務者ノ保管ニ任シ執達吏之ヲ監督スルモノトス

但シ(二)(三)ノ場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルキニ限リ其効力ヲ生ス

以上ノ規定ハ債權者又ハ第三者(物ノ提出ヲ拒マサル)ノ占有中ニ在ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用スルモノトス
茲ニ注意ス可キハ有体動物ハ如何ナルモノニテモ右ノ手

續ニ從テ之ヲ差押フルヲ得ルト雖モ法律ハ左ノ制限ヲ設ケ以テ天物ヲ暴殄スルヲ警メタリ

(一)果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルヲ得レモ通常ノ成熟時期ノ前一ヶ月内ニ非サレハ之ヲ差押フルヲ許サス

(二)蠶ハ其多分カ繭ヲ製造スル爲メ蠶ト爲リタル後ニ非サレハ之ヲ差押フルヲ許サス

蠶ハ我邦ノ名産外國互市場中國光ヲ發揚シ聊カ以テ彼レニ誇ルアルモノハ獨リ此品ノミ蠶ノ消長ハ國利民福ノ繫ル處忽ニス可テサルモノアリ我立法者特ニ意ヲ茲ニ留メタルハ先ツ我心ヲ得タリ
以上差押ノ効力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ產出物ニモ當

感概意外
スノ邊ニ發

然及フモノトス是主ハ從ヲ併スノ原則ニシテ深ク吟味ス
 ル程ノヲニモアラヌ
 右差押處分實施ノ後ナハ執達吏ハ其物品ニ對シテ如何ナ
 ル處置ヲ爲ス可キヤ此場合ニ於テハ執達吏ハ債權者又ハ
 裁判所ノ特別委任ナシトモ法律ノ規定ニ從ヒ公ノ競賣方
 法ヲ以テ其差押物ヲ賣却スルモノトス
 然レモ茲ニ注意ス可キハ差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ
 少ナシトモ七日ノ時間ヲ存スルヲ要ス但差押債權者執
 行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ
 競賣ヲ更ニ早ク爲サンヲ合意シタルモ又ハ差押物ヲ永
 ク貯藏スルニ付キ不相應ノ費用若クハ其物ノ價格ノ著シ
 ク減少スル危害ヲ避ケン爲メ競賣ヲ早ク爲スノ必要ナ

ルモ此限ニ在ラサルヲ及ヒ競賣ノ場所ハ差押ヲ爲シタ
 ル市町村ニ於テ之ヲ爲スヲ通則トスレモ差押債權者及ヒ
 債務者ガ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スヲ合意シタルモ強テ
 差押ヲ爲セシ市町村ニ於テ之ヲ爲スヲ要セサルヲ是ナリ
 借テ執達吏ハ愈差押物ヲ競賣ニ付セントスルニ際シ準備
 及ヒ處分ス可キモノハ左ノ如シ

- (一)競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告シ且其公告ニハ競賣
 ス可キ物ヲ表示ス可キヲ
 - (二)競賣ス可キ物ノ中ニ高價ノモノ有ルモハ適當ナル鑑
 定人ヲシテ其評價ヲ爲サシム可キヲ
 - (三)差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡ス可キヲ
- 但シ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カル、ヲ

債務者ニ許シタルキハ此限リニ在ラス
執達吏差押物件ヲ競賣ニ付キ物件ノ性質ニヨリ
其取扱處分ニ差異アルヲ左ノ如シ

(一)金銀物

金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下ニ競落スルヲ許サ
ス若シ其實價迄ニ競賣ヲ爲ス者ナキキハ執達吏ハ金
銀ノ實價ニ達スル價額ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却スルヲ
得

(二)有價證券

有價證券ヲ差押ヘタルキハ相場アルモノハ賣却日ノ
相場ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却シ其相場ナキモノハ一般
ノ規定ニ從ヒテ之ヲ競賣ス可キモノトス

而シテ有價證券ハ記名ナルキト無記名ナルキトニ付キ其
處置ヲ異ニス即チ左ノ如シ

(一)有價證券ノ記名ナルキハ執行裁判所ハ買主ノ氏名ニ
書換ヲ爲サシメ及ヒ之ガ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者
ニ代リ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルヲ得

(二)無記名ノ證券ニシテ記名ニ換ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ
流通ヲ止メタルモノナルキハ執行裁判所ハ其流通回
復ヲ爲サシメ及ヒ之ガ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ
代リテ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルヲ得

(三)土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘタル果實
右果實ノ競賣ハ其成熟ノ後ヲ始メテ之ヲ爲スヲ許
ス而シテ執達吏ハ競賣ノ爲メ其收穫ヲ爲サシムル權

利アリ

(四) 蠶

差押へタル蠶ノ競賣ハ全ク繭ト爲リタル後始メテ之ヲ爲スヲ許ス

最高價競賣ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス而シテ競落物ノ引渡ハ競買條件ニ定メタル支拂期日又ハ其定ナキハ競賣期日ノ終ル前代金ノ支拂アルト共ニ競落物品ヲ引渡ス可キモノトス

若シ最高價競賣人即チ競落人ニ於テ右期日ニ代金ノ支拂ヲ爲シテ物ノ引渡ヲ求メサルハ執達吏ハ更ニ其物ヲ再競賣ス可キモノトス而シテ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競賣ニ加ハルヲ許サスシテ猶ホ左ノ制裁ヲ負擔

セシメラル

(一) 再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キハ不足ヲ擔任セシメ

(二) 若シ又高キハ剩餘ヲ請求スルヲ許サス
債務者ノ物品ヲ差押へ且之ヲ競賣ニ付スル所以ハ債權者ノ權利ヲ満足セシムルニアルヲ以テ執達吏ガ競賣ニ付シタル物品ハ必スシモ悉皆之ヲ競賣ニスルヲ要セス苟シモ其賣得金ガ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルキハ直チニ競賣ヲ差止メサル可ラス而シテ執達吏其賣得金ヲ領取シタルハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做スルモノトス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カル、
一、債務者ニ許シタルハ此限ニ在ラ

配當ノ要求ハ競賣期日ノ終ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲
 スコトヲ得而シテ配當要求者ハ第五百八十九條ニ從ヒ第五
 百九拾條ノ手續ヲ爲ス可シ然リ而シテ競賣ニ付シタル賣
 得金カ各債權者ヲ満足セシムル能ハサル場合ニ於テ各債
 權者ニ配當ノ協議調ハサルキハ如何ス可キヤ
 斯ル場合ニ於テハ其賣得金ヲ以テ供託ニ付ス可キモノト
 ス而シテ又數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ヘタル
 キ之ヲ以テ各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於
 テモ亦同シ右等ノ場合ニ於テハ執達吏ハ其事情ヲ執行裁
 判所ニ届出可キモノトス而シテ其届書ハ執行手續ニ關ス
 ル書類ヲ添付シテ差出ス可キモノトス

終ニ臨ンテ猶一言注意シ置ク可キハ左ノ三點ナリトス

(一)以上ノ規定ニ依ラヌシテ差押物ヲ賣却ス可キ場合ア
 ルコト是ナリ(第五百八十五條ニ規定セリ)

(二)執達吏ハ他ノ債權者ノ爲メニ既ニ差押ヘタル物ヲ再
 差押フルコトヲ得サルコト是ナリ(第五百八十六條第五
 百八十七條參觀)

(三)適當ナル期間經過スルモ執達吏競賣ヲ爲サ、ルキ差
 押債權者及各債權者ハ之ヲ攻撃シ得ル方法アルコト是
 ナリ(第五百八十八條)

是ヨリ無体動産ノ部ニ移ラン
 無体動産ノ差押ハ左ノ如シ
 第一即チ一般ノ債權ニ付テハ差押命令ヲ以テ財産ノ處

置權ヲ拘束ス

第二其他ノ財産權ニ付テハ執達吏ハ直チニ其物品ヲ差押ヘ執達吏自ラ之ヲ占有ス

第一ノ場合ハ左ノ如シ

第三者(第三債務者)ニ對スル債權者ノ債權ニシテ金錢ノ支拂又ハ他ノ有体物若クハ有價證券ノ引渡若クハ給付ヲ目的トスルモノ、強制執行ハ執行裁判所ノ差押命令ヲ以テ之ヲ爲ス

而シテ此ノ場合ニ於テモ金錢ノ債權ヲ差押フルキト抵當アル債權ヲ差押フキハ其處分ヲ異ニス即チ

(イ)金錢ノ債權ヲ差押フ可キキハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スヲ禁シ又債務者ニ對シ債

權ノ處分殊ニ其取立ヲ爲ス可ラサルヲ命令ス可シ

差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ

送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知ス可シ

差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタル

モノト看做ス

(ロ)抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務者

ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入ス

ル權利アリ此記入ノ申請ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ其

申請ハ差押命令ノ申請ト之ヲ併合スルヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動産ノ所有者(第三債務者)

ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ手續ヲ爲ス可シ

債權者差押命令ヲ申請セント欲セハ宜ク差押ヲ可キ債權

ノ種類及ヒ數額ヲ明瞭ニ開示ス可シ(書面又ハ口頭ヲ以テ)
 然ルキハ執行裁判所ハ其申請ヲ受理シタルキハ豫シメ第
 三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ直チニ差押命令ヲ
 發スルナリ斯クノ如ク審訊ヲ要セスシテ一直線ニ差押命
 令ヲ發スル所以ノモノハ緩慢機ヲ失シ差押ノ効ヲ空フセ
 サラソガ爲メナリ然ルニ若シ之ヲ審訊シタル上ナラデハ
 差押命令ヲ發スルヲ得ストセンカ然ル時ハ債務者(并ニ
 第三債務者共)ハ充分ニ處置計畫ヲ施シテ逃レ得ル丈ハ差
 押ヲ可ラザラシメント爲スハ今日ノ人情ナリ是其審訊ヲ
 要セスシテ不意ニ出テ以テ差押ノ効ヲ完ラセシメント規
 定セシ所以ナリ法律豈ニ正直正兵衛ヲ以テノミ天下ノ人
 ニ接センヤ然リ而シテ債權者差押命令ニ因テ差押ヲ實行

利ノ存スル
 處也伏スル
 者三タヒ省
 フミテ之ヲ行
 テ可矣

シタル後チ其事金錢ノ債權ノ處分方法ニ就テハ第六百條
 ノ規定ニ從ヒ又支拂ニ換ヘ券面額ニテ債權ヲ轉付スル命
 令アル場合ノ債權ノ位地ハ第六百一條ノ規定ニ從ヒ取立
 ノ爲メノ命令ニ係ルキハ第六百二條ノ規定ニ從フ可キモ
 ノトス

第二ノ場合ハ左ノ如シ

- (一)手形其他裏書ヲ以テ移轉スルヲ得ル證券ニ因レル
 債權ノ差押ハ執達吏其證券ヲ占有シテ之ヲ爲ス
- (二)俸給又ハ此ニ類スル繼續収入ノ債權ノ差押ハ債權額
 ヲ限リトシ差押後ニ収入スヘキ金額ニ及フモノトス
- (三)職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官兼任又ハ増俸ニ因
 ル收入ニモ亦及フモノトス

(四)債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ差押債權者ニ引渡ス義務アリ債權者ハ差押命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取上ケシムルヲ得以上分論セシ有体動産及無体動産ヲ一括シテ又茲ニ查究セシ

抑モ差押債權者カ差押ヲ執行スルニ付キ豫メ運動上一定ノ方針ヲ立テサル可ラサルモノアリ斯ル場合ニ處スル方法ハ第六百九條ヲ以テ之ヲ規定セリ即チ左ノ如シ

差押債權者ハ第三債務者ヲシテ差押命令ノ送達ヨリ七日ノ期間内ニ書面ヲ以テ左ノ陳述ヲ爲サシメノヲ裁判所ニ申立ツルヲ得

第一債權ノ認諾ノ有無及ヒ其限度並ニ支拂ヲ爲ス意思

ノ有無及ヒ其限度

第二債權ニ付キ他ノ者ヨリ請求ノ有無及ヒ其種類

第三債權カ既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラレタルノ有無及ヒ其請求ノ種類

右ノ陳述ヲ求ムル催告ハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ第三陳述ヲ怠リタルキハ此ニ因リテ生スル損害ニ付キ其責ニ任ス

即チ以上催告ニ對シ其陳述ヲ怠リタル第三債務者ヲシテ損害ノ責ニ任セシムル所以ノモノハ差押債權者ハ第三債務者ノ陳述ニ因テ一ハ以テ差押ニ因テ得ル所ノ利益ノ大体ヲ知リ一ハ以テ配當加入者ノ多寡及ヒ債權ノ種類ヲ知ル等差押債權者ガ權利ノ屈伸消長ニ關スルヲ小少ニ非サ

レハナリ

債權者カ差押命令ノ旨趣ニ基キ第三債務者ヲ相手取り訴訟ヲ起スルハ一ニ債務者ノ位地ニ立ツテ之ヲ爲スモノトス何トナレハ該訴ハ畢竟債務者ニ代リテ其權利ヲ執行スルニ過キサレハナリ故ニ債權者ハ一般ノ規定ニ從ヒテ管轄ヲ有スル裁判所ニ其訴ヲ爲サ、ル可ラス即チ金額百圓未滿ノモノナレハ區裁判所百圓以上ナレハ地方裁判所へ提起セサル可ラス加之債務者内國ニ在リテ住處ノ知レタルキハ其訴訟ヲ之ニ告知ス可キモノトス然レモ債權者ハ債務者ノ代理人ニ非サルヲ以テ債權者ガ第三債務者ニ對シ施シタル訴訟其他ノ行爲ノ懈怠不注意ニ因テ債務者ニ損害ノ生シタルキハ債權者ハ其責ニ任セ

サル可ラス(第六百十一條參觀)其レ然リ故ニ又債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ取得シタル權利ヲ拋棄スルヲ得ルモ爲メニ其全体請求權ヲ害セラル、トナシ何トナレハ之ヲ拋棄スルト拋棄セサルトハ自己ノ自由ニシテ彼報償ヲ得テ權利ノ進行ヲ制限シタルモノト同日ノ論ニ非サレハナリ故ニ假令其一部分ヲ拋棄スルモ爲メニ全体ノ請求權ハ毅然存立シテ害セラル、トナキ所以ナリ茲ニ又便宜上換價方法ヲ設ケ債權者ヲ満足セシムル道アリ即チ左ノ如シ

(一)差押ヘタル債權カ條件附若クハ有期ナルキハ反對給付ニ繋リ若クハ他ノ理由アリテ其取立ノ困難ナルキハ裁判所ハ申立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命

スルヲ得ルヲ尤モ債務者内國ニ在リテ住所ノ知レ
タルキハ其申立ヲ許ス決定前ニ之ヲ審訊ス可キモノ
トス何トナレハ債務者ハ其債權ノ原由ヲ知悉ス可ク
レハナリ

(二)有体動産ノ請求ノ差押ニ付テハ其動産ヲ債權者ノ委
任シタル執達吏ニ引渡ス可キヲ命スベシ右動産ノ
換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス

(三)不動産ノ請求ノ差押ニ付テハ債權者ノ申立ニ因リ其
不動産ヲ不動産所在地ノ區裁判所ヨリ命シタル保管
人ニ引渡スヲ命ス可シ
引渡シタル不動産ニ付テノ強制執行ハ不動産ニ對ス
ル強制執行ニ付テノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

然レモ彼ノ有体物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ付テハ支拂ニ
換ヘ轉付スル命令ヲ爲スヲ得ス何トナレハ此等ノ請求
ハ原來其物ノ引渡又ハ給付ヲ以テ目的トナスニアレハ換
價ス可キ性質ノモノニ非サレハナリ
之ヲ要スルニ有体動産ナルト無体動産ナルトヲ問ハス總
テ動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲スモノトス
何トナレハ是レ不動産ト異ニシテ動産ハ容易ニ運轉移動
スルヲ得ベキモノナルヲ以テ藏匿脱漏ノ患鮮カラサレ
ハナリ而シテ差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債
權者ニ辨濟スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲メニ必
要ナルモノ、外ニ及ホスヲ得サルモノトス一見スルモ
ハ此規定ハ至理至當ニシテ間然ス可キ點ナキガ如クナレ

凡實際ニ徴シテ債權者ニ迷惑ヲ掛ルコト鮮少ニ非サル可シ
 何トナレハ凡ソ差押セラル、ガ如キ者ニシテ債務ヲ負フ
 者ハ差押債權者ノミニ非サレハナリ夫レ然リ而ルニ差押
 債權者ノ外ニ各債權者即チ配當加入者アルニモ拘ハラズ
 差押債權者ガ執行力アル正本ニ掲ケタル請求額ト及之レ
 ガ爲メニ要スル強制執行ノ費用ノ外ハ差押フルコト得ス
 トセハ第一差押債權者ハ其目的ヲ満足セシムル能ハサル
 ノミナラス俗ニ所謂ユル大骨折テ應ニ取ラル、憾ミナキ
 能ハス若シ夫レ債權者ハ差押債權者ノ外ニナク而シテ債
 務者他ニ債務ノ果ス可キモノナケレハ此規定ハ實ニ完全
 無缺ナルモ實際上ヨリ之レガ精觀密察ヲ施スキハ未ダ今
 日ノ實勢ニ通セサル規定ナラスヤノ疑ナキヲ得サルナリ

「人情ニ通
 シ世故ニ老
 ルニ非サレ
 ハ此言ヲ爲
 ス能ハス」

而シテ差押ヲ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フ
 テ剩餘ヲ得ル見込ナキハ強制執行ヲ爲スト得スト規
 定セシハ蓋シ如此キ場合ハ徒ラニ擾乱攪動ノ煩勞ヲ取ル
 ノミニシテ毫モ事ニ益ナケレハナリ蓋シ至當ノ制度ト云
 フ可キナリ(第五百六十四條參觀)

又有体動物ナルト無体動物ナルトニ關セズ差押ニ付キ彼
 ノ第三者カ差押ヲ受ク可キ物ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有ス
 ルモ差押權ヲ妨ケラレサルハ勿論ナリ然レ凡第五百四十
 九條ノ規定ニ從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先(先取特權)ノ
 辨濟ヲ請求スル權利ハ此ノ差押ノ爲メニ妨ケラル、コト
 ル無シ抑モ此場合ニ於テ優先ノ權利ヲ主張スルニ差押債
 權者ノ異義ナク之ヲ甘諾スルキハ論モナキ事柄ナレ凡優

先ノ權利ノ有無ニ付キ異義アルキハ優先權ヲ主張スルモノハ其理由ヲ裁判所ニ開示シ以テ其指揮命令ヲ俟タサル可ラス即チ其開示シタル事情カ法律上理由アリト見ヘ且事實上ノ點ニ付キ疏明立チタリト看做スルハ裁判所ハ茲ニ於テ賣得金ノ供託ヲ命シ以テ優先權利者ヲ保護スルモノトス但此事項ニ付テハ第五百五十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス(第五百六十五條參觀)

以下右配當ノ手續ニ移リ之ヲ吟味セント欲ス抑モ配當ハ法律ノ之ニ干涉スルヲ欲セサルモノニシテ及フ可クシテハ各債權者間ノ協議熟談ヲ以テ適宜ニ之ヲ配當處分シ了ラントナ要ス然レモ各債權者間ニ於テ互ニ債權ノアル處ヲ固執シ配當上不平異義ヲ挿ムルハ已ムヲ得ス裁判所ニ

向テ適當ノ配當處分ヲ仰カサルヲ得ス是レ配當手續ナルモノ、規定ヲ感起セシ所以ナリ

右動産ニ對スル配當手續ハ何時之ヲ始ムルヤト云フニ競賣期日又ハ金錢差押ノ日ナリ十四日ノ期間内ニ債權者間ノ協議調ハサル爲メ金額ヲ供託シタルキニ着手ス裁判所ハ茲ニ於テ事情届書ニ基キ七日ノ期間内ニ元金利息費用其他附帶ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ各債權者ニ催告シ以テ配當表ヲ調製スルモノトス而シテ斯ノ催告アルニモ拘ハラズ右期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ配當表ヲ作ルニ際シ只配當要求并ニ届書ノ旨趣及ヒ其憑據書類ニ依リ之ヲ計算ス但後ニ債權額ヲ補充スルモノ之ヲ許サス裁判所ハ猶公平ノ配當ヲ爲サシガ爲メ遅クモ配當期日

ノ三日間ニ配當表ヲ裁判所書記課ニ備置キ各債權者及ヒ債務者ニ閱覽セシメ不都合ナル點ハ改正増減ノ申立ヲ爲スヲ得セシメタル後始メテ配當表ニ從テ配當實施ニ及フモノトス

配當實施ニ際シ茲ニ注意ス可キモノアリソハ或事情ノ爲メ配當金額ヲ供託ニ付シ後日之レガ配當實施ヲ爲スモノ是ナリ即チ左ノ如シ

(一)停止條件附ノ債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託シ民法ニ從ヒテ條件ノ成否ニ依リ後ニ之ヲ支拂ヒ又ハ更ニ配當ス可シ(第六百三十條第二項)

(二)第五百九十一條第三項ノ場合又ハ假差押ノ都合ニ於テ未ダ確定セサル債權其他異義アル債權ノ配當額ハ

仍ホ之ヲ供託ス可シ(第六百三十條第三項)

右ハ唯配當ニ付キ一通リノ事ヲ論述シタルニ止レトモ以下猶配當ニ付キ異義ノ申立ヲ爲シタルモ裁判所ハ如何ニ之ヲ處分ス可キヤ又ハ異義者ハ如何ナル位置ニ立ツ可キモノナルヤヲ吟味セント欲ス即チ左ノ如シ

(一)異義ノ申立アルモ他ノ債權者ニ於テ異義ヲ正當ト認ムルカ又ハ他ノ方法ニ於テ合意スルモ裁判所ハ之ニ從ヒ配當表ヲ更正シ配當ヲ實施ス

(二)異義ノ完結セサルモ異義ナキ部分ニ限り又期日ニ出頭セサル債權者ハ配當表ノ實施ニ同意シタルモノト看做シ均シク配當ヲ實施ス

(三)然レモ期日ニ於テ異義ノ完結セサルモ異義ヲ申立

タル債權者ハ他ノ債權者ニ對シテ訴ヲ起シタルトナ
期日ヨリ七日ノ期間内ニ裁判所ニ證明セサル可ラス
若其期間ヲ徒過シタル後ハ裁判所ハ異義ニ拘ハラズ
配當處分ヲ實施ス

(四)若シ又期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨリ申
立テタル異義ニ關係ヲ有スルモハ其債權者ハ異義ヲ
正當ナリト認メタルモノト看做シ前規ノ規定ヲ實施
スルコトヲ得ス

(五)然レモ右ハ配當處分實施ノ整理上ニ於テ之ヲ強行ス
ルモノナレハ假令前規ノ期間ヲ怠リタルモト雖モ優
先權ヲ主張スル權利ハ配當實施ノ爲メ妨ケラル、
無シ故ニ斯ル場合ニ於テハ右優先ノ債權者ハ配當表

ニ從ヒテ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シテ訴ヲ以テ其受
領セシ配當金ヲ支出セシムルコトヲ得可シ

(六)異義ノ申立ヲ受理シタルモハ裁判所ハ異義ノ要點即
チ配當額ノ係争部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數
額ヲ以テ支拂フ可キヤヲ決定ス

若シ之ヲ決定スルコト適當ト思量セサルモハ更ニ判
決ヲ以テ新ナル配當表ノ調製及ヒ他ノ配當手續ヲ命
ス可キモノトス

(七)右異義ノ判決確定スルモハ裁判所ハ配當表ニ依リ他
ノ手續ヲ爲シ配當ヲ實施ス即チ其處分法左ノ如シ
(八)債權全部ノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ配當額支拂
證ヲ交附スルト同時ニ其所持スル執行力アル正本

又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス

(ろ)債權一分ノミノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ執行力

アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ニ配當額

ヲ記入シテ返還シ且配當額支拂證ヲ交付スルト同

時ニ右債權者ヨリ金額ヲ證記シタル受取書ヲ差出

セシメ之ヲ債權者ニ交付ス

(は)期日ニ出頭セサル債權者ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託

ニ付ス

(に)右ノ手續ヲ爲シタルキハ調書ニ記載シテ之ヲ明確

ニス可キモノトス

(八)異義ヲ申立テタル債權者カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セ

サルキハ如何ニ處分ス可キヤ此時ハ異義ヲ取り下ケ

タルモノト看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲シ之ヲ棄却スル
モノトス

是ヨリ不動産ニ係ル強制執行ヲ吟味スルノ時期ニ到着セ

リ抑モ不動産強制執行ハ之ヲ大別シテ二トス

(一)強制競賣

(二)強制管理

強制競賣ハ不動産ノ上ニ付テ直チニ其物ヲ糶賣ニ付シ以
テ債權ヲ満足セシムル方法ニシテ強制管理ハ之ニ反シ不
動産ノ収益ヲ以テ徐ロニ義務ノ辨濟ヲ爲サシムル方法ナ
リ而シテ強制競賣ナルト強制管理ナルトヲ問ハス債權者
ハ自己ノ撰擇ニ依リ一個ノ方法ヲ以テ又ハ二個ノ方法ヲ

併セテ執行セシムルノ權利ヲ有ス余ハ先ツ強制競賣ヨリ
之ヲ吟味セント欲ス

不動産強制執行ハ動産強制執行ヨリモ擲重ナリ是レ其不
動産ナル性質ノ上ヨリ又一國習慣ノ上ヨリ然ラサルヲ得
サルモノトセリ故ニ債權者今強制競賣ヲ請求セントスル
ニハ左ノ手續ニ因テ進行セサル可ラス

(一)強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

(イ)債權者債務者及裁判所ノ表示

(ろ)不動産ノ表示

(は)競賣ノ原因タル一ノ債權者及ヒ其執行シ得可キ一
定ノ債務名義

(二)申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添付スルヲ

要ス

(イ)登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ
付テハ登記判事ノ認證書

(ろ)登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所
有タルヲ證ス可キ證書

(は)地所ニ付テハ國郡市町村字番地地目反別若クハ坪
數土地基帳ニ登録シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納
ム可キ一ケ年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

(に)建物ニ付テハ國郡市町村字番地構造ノ種類建坪及
其建物ニ付キ納ム可キ一ケ年ノ公課ヲ證ス可キ證
書

(は)地所建物ニ付キ賃貸借アル場合ニ於テハ其期限並

ニ借賃ヲ證ス可キ證書

る號は號及ヒに號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管スル
 官廳ニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得又ニ號及ヒは號ノ要件ヲ
 證明スル能ハサルキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執
 行裁判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執
 達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ猶又強制管理ノ爲メ既
 ニ不動産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其執行記録ニハ號乃至
 ハ號ノ要件ヲ記載シタルモノ有ルキハ其證書ヲ添付スル
 コトヲ要セサルモノトス
 以上ノ手續ヲ履行シテ競賣強制ヲ申請シタルキハ裁判所
 ハ茲ニ於テ競賣手續ヲ開始ス而シテ競賣手續ノ開始決定
 ニハ同時ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ差押フルコトヲ宣言ス可

シ然レモ畢竟該差押ハ債權者ノ權利ヲ保護スル爲メノ拘
 束手續ニ過キサルヲ以テ債務者不動産ノ利用及管理ヲ爲
 スコトヲ妨ク可ラス是レ競賣強制ノ強制管理ニ異ナル要點
 ナリ抑モ右差押ノ効力ハ何時生スルヤト云フニ差押ハ其
 決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス而シテ此送
 達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スモノトス茲ニ注意ス可キハ裁判
 所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ他ノ債
 權者アリ猶其不動産ニ對シ強制競賣ノ申請アルモ更ニ開
 始決定ヲ爲スコトヲ得サルコト是ナリ然レモ該申請ハ執行記
 録ニ添付スルニ因リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シ
 タル競賣手續取消ト爲リタルキハ第六百四十九條第一項
 ノ規定ヲ害セサル限リハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス

競賣手續開始スルキハ配當要求者ハ競落期日ノ終ニ至ル
 マテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得而シテ配當ヲ要求セソト
 スル者ハ其要求ノ原因ヲ開始シ且裁判所ノ所在地ニ住居
 ナモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住居ヲ撰定シテ執行裁判
 所ニ屈出ツ可キモノトス
 即チ競賣手續開始決定ノ後チ更ニ同一不動産ニ付キ強制
 競賣ノ申立テアリタルキ(一)又ハ配當要求ヲ出願シタル者
 アルキ(二)裁判所ハ其趣キヲ利害關係人ニ通告ス利害關係
 人ハ第六百四十八條ヲ以テ之ヲ規定セリ曰ク
 左ニ掲クル者ヲ競賣手續ニ於テノ利害關係人ト爲ス
 第一差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求
 スル者

第二債務者

第三登記簿ニ記入アル不動産上ノ權利者

第四不動産上ノ權利者トシテ其債權ヲ證明シ執行記録

ニ備フ可キ届出ヲ爲シタル者

執行力アル正本ニ因テ配當要求ヲ爲スモノハ固ヨリ權利
 確定スルヲ以テ別ニ茲ニ論スルヲ要セサレト之レニ反シ
 執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ニ付
 テハ債務者其債權ヲ認諾スルキハ格別若シ債務者之ヲ認
 諾セサルキハ如何ス可キヤ即チ第六百四十七條ノ決定ニ
 從ヒ訴ヲ以テ其債權ヲ確定セサル可ラス何トナレハ債權
 者ハ權利ヲ確定セサレハ配當ヲ要求ス可キ權利ナケレハ
 ナリ

茲ニ於テ裁判所ハ直チニ強制競賣ヲ實行ス可キ時期ニ達シタルニ猶左ノ點ヲ顧ミサル可ラス

(一)差押債權者ノ債權ニ先タツ債權(第六百五十四條裁判所ハ競賣開始ノ決定ヲ爲シタルニ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官廳ニ通知シ其不動産ニ對スル債權ノ有無及ヒ限度ヲ申出ツ可キヲ時期ヲ定メテ催告ス可シト即チ租稅其他ノ公課ノ如キハ即チ差押債權者ノ債權ニ先タツ債權ナリ)ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辨濟スルニ足ル見込アルニ非サレハ賣却ヲ爲スヲ得サルナリ(第六百四十九條參觀)

(二)競賣申立ノ取下ニ因リテ差押ハ消滅ス(第六百五十條

第三項

(三)豫メ知ルニ於テハ手續ノ開始ヲ妨ク可キ事實カ登記判事ノ通知ニ依リ顯ハル、キハ裁判所ハ其事情ニ因リ直チニ手續ヲ取消シ又ハ裁判所ノ異見ヲ以テ定ムル期間内ニ其障礙ノ消滅シタルヲ證明ス可キヲ債權者ニ命ス可シ其期間内ニ此證明ヲナサ、ルキハ期間ノ滿了後職權ヲ以テ手續ヲ取消ス可シ(第六百五十三條)

(四)裁判所ハ最低競賣價額(第六百五十五條參觀)ヲ以テ差押者ノ債權ニ先タツ不動産上ノ總テノ負擔及ヒ手續ノ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル見込ナシトスルニハ差押債權者ニ其旨ヲ通知ス可シ(第六百五十六條第一項)

(五)右通知ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者カ前項ノ負擔及ヒ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル可キ價額ヲ定メ且其價額ニ應スル競賣人ナキ場合ニ於テハ自ラ其價額ヲ以テ買受シ可キ旨ヲ申立テ十分ナル保證ヲ立テサルモハ競賣手續ヲ取消ス可シ(第六百五十六條第二項)

以上ノ點ヲ吟味シテ毫モ牴觸スル處ナク且先取特權及其費用ヲ辨濟シ剩餘ヲ得ル見込アルモ又ハ差押債權者(五)ノ場合ニ付自ラ其價額ヲ以テ買受シ可キ旨ヲ申立テ更ニ十分ナル保證ヲ立テタルモ始メテ競賣實施ニ着手スルモノトス玆ニ於テ裁判所ハ職權ヲ以テ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ之ヲ公告ス其手續左ノ如シ

(一)競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 租稅其他ノ公課

第三 賃貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃

第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨

第五 競賣期日ノ場所日時及ヒ競賣ヲ爲ス可キ執達吏ノ

氏名並ニ住所

第六 最低競賣價額

第七 競落期日ノ場所及ヒ日時

第八 執行記録ヲ閱覽シ得ヘキ場所

第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者

其債權ヲ申出ツ可キ旨

第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨

競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ
又此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所
ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム

(二)競賣期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ揭示シテ之ヲ爲ス

第一裁判所ノ揭示板

第二不動産所在地ノ市町村ノ揭示板

此他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一個又ハ數個ノ新聞紙ニ
掲載スルヲ得

如此クニシテ競賣期日ヲ開キタル後執達吏ハ執行記録ヲ
各人ノ閱覽ニ供シ又特別ノ賣却條件アルキ之ヲ告知シ且
競賣價額申立ヲ催告ス而シテ利害關係人カ權利保全ノ爲
メ或ル競賣人ヨリ保證ヲ立テシメノヲ申立ツルハ其

競賣人ハ左ノ二項ノ一ヲ以テ保證ヲ立ツルニ非サレバ競
賣ヲ爲スヲ許サス

(一)競賣價額十分ノ一ニ當ル金額ヲ現金ヲ以テ直チニ執
達吏ニ預クルヲ

(二)若クハ競賣價額十分ノ一ニ相當スル金額ヲ有價證券
ヲ以テ直チニ執達吏ニ預クルヲ

而シテ其申立ハ同一ナル競賣人其後ノ競買ニ付テモ亦其
効力アリト規定セラレタルヲ以テ其後ノ競買ニ付テハ利
害關係人ヨリ特ニ保證ノ申立ヲ要求セサルモ曩キニ申立
テラレタル同一ノ競買人ハ無論保證ヲ立テサル可ラス然
レモ茲ニ注意ス可キハ利害關係人ハ競賣人カ競買價額ノ
申出アリタル後直チニ之ヲ述フルヲ要スルヲ是ナリ若

シ緩慢時期ヲ失セハ第六百六十四條ノ保證ヲ立テシムル
權利ハ之ヲ主張スルヲ能ハス
抑モ競賣ニ付賣却條件ニ二アリ

(一)合意ヲ以テ變更スルヲ許サ、ル賣却條件(即チ法律
上ノ賣却條件)

(二)合意ヲ以テ變更スルヲ許ス賣却條件
合意ヲ以テ變更スルヲ許サ、ル賣却條件トハ即チ最低
競買價額ニ合意ヲ以テ變更スルヲ許サス賣却條件ト
ハ即チ訴訟法第二節第一款ニ掲ケタル賣却條件ニシテ而
シテ該賣却條件ハ利害關係人ノ合意アルキハ之ヲ變更ス
ルヲ許スヲ云フ何トナレハ利害關係人サヘ合意セハ法
律ハ之ガ干涉ヲ試ミスシテ自由ナル賣買ヲ爲サシム可キ

ハ固ヨリ其欲スル所ナレバナリ然リ而シテ利害關係人ノ
合意アルキト雖モ最低競賣價額ニ付キ獨リ變更ヲ許サ、
ル所以ノモノハ一ニ債務者ノ利益ヲ保護スルノ好意ニ外
ナラス

競買人ハ規定ニ因テ一タヒ競買價額ノ申出ヲ爲シタルキ
ハ如何ナル位地ニ立ツ可キモノナルヤ即チ左ノ如シ

(一)高價ノ競買ノ許アルマテ其申出テタル價額ニ付キ拘
束ヲ受クルモノトス

(二)最高價競買人ノ氏名及其價額ヲ呼上ケタル告知ニ因
リ其競買ノ責務ヲ免カル、ト同時ニ曩キニ預ケタル
保證アルキハ其返還ヲ求ムル權利アリ

如此クニシテ始メテ競賣ノ終局ヲ告グルモノトス茲ニ於

テ執達吏ハ競賣調書ヲ作り其顛末ヲ明白ニス而シテ今該調書ニ記載ス可キ要件ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 不動産ノ表示

第二 差押債權者ノ表示

第三 執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シタルコト又特別賣却條件アルキハ之ヲ告知シタルコト

第四 競買價額ノ申出ヲ催告シタル日時

第五 總テノ競買價額並ニ其申出人民ノ氏名住所又ハ許ス可キ競買ノ申出ナキコト

第六 競賣ノ終局ヲ告知シタル日時

第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保證ヲ立テタルコト又ハ申立アルモ保證ヲ立テサル爲メ其競買ヲ許サ、ルコト

第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタルコト右ノ外最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調書ニ署名捺印ス若シ此等ノ者調書ノ作成前ニ退席シタルキハ其旨ヲ附記ス猶又競買ノ保證ノ爲メ預リタル金錢又ハ有價證券ヲ返還シタルキハ執達吏ハ受取證ヲ取り之ヲ調書ニ添附ス可キモノトス

茲ニ一言ス可キハ最高價競買人ハ執行裁判所ノ所在地ニ住所ヲモ事務所ヲモ有セサルキハ假住所ヲ選定シ其旨ヲ届出テザル可ラサル義務アリ若シ之ヲ怠リタルキハ第四百四拾三條第三項ノ規定ヲ準用スルコト是ナリ(第四百四拾三條第三項ニ曰ク前項ノ届出ヲ爲サ、ルキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員ハ交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被

告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

右ハ競賣ニ於ケル普通ノ綱領ヲ叙述シタルモノナレバ若シ競買期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申立ナキハ如何ス可キヤ

此場合ニ於テハ畢竟價額ノ不廉ナルガ爲メ競買ヲ爲サ、ルモノナルニ付キ第六百四十九條第一項(差押債權者ノ債權ニ先ツツ債權ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辨濟スル見込アルキニ非サレハ賣却ヲ爲スヲ得ス)ノ規定ヲ害セサル限り

ハ裁判所ハ其意見ヲ以テ最低競賣價額ヲ相當ニ低減シ更ニ新競賣期日ヲ定メ以テ再度ノ競賣ニ附セサル可ラス如此ク爲スニモ拘ハラズ猶ホ競買價額ノ申出ナキハ如何曰ク第六百四十九條第一項ノ規定ヲ害セサル範圍内迄ハ何度ニテモ前同様ノ手續ヲ以テ新競賣ニ附ス可キモノトス次キニ研究ス可キハ競落ノ許可ニ付キ利害關係人ヨリ異義ノ申立ヲ爲スヲ是ナリ若シ異義ノ申立アルキハ最高價競買人ハ競落許可ノ決定アル迄ハ其物件ヲ獲得スル權利ナキモノトス而シテ今利害關係人が異義ノ申立ハ如何ナル理由ヲ根據トシテ之ヲ主張スルヲ得ルヤ即チ第六百七十二條ニ於テ舉示サレタル場合ハ左ノ如シ

第一強制執行ヲ許ス可ラサルコト又ハ執行ヲ續行ス可カラサルコト

第二最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スル能力ナキコト

第三法律上ノ賣却條件ニ抵觸シテ競買ヲ爲シタルコト又ハ總テノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條件ヲ變更シタルコト

第四競賣期日ノ公告ニ第六百五十八條ニ掲ケタル要件ノ記載ナキコト

第五競賣期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ依リテ之ヲ爲ササルコト

第六第六百五十九條ニ規定シタル期間ヲ存セザリシコト

第七第六百六十五條第二項及ヒ第六百六十六條第一項ノ規定ニ違背シタルコト

第八第六百六十四條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリト呼上ケタルコト

之ヲ要スルニ競賣規定ノ法則ニ反シ之ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サズ或ハ之ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サザルモ法律上之ヲ享得ス可キ能力ナキカ或ハ之レアルモノト雖モ詐偽共謀等ニ因テ不正ニ最高價競買人ノ資格ヲ得タル者ノ如キハ之ヲ理由トシテ異議ノ申立ヲ爲シ得ルハ勿論ニシテ必スシモ前記ノ各場合ノミニ限レルモノト速了ス可ラサルナリ然レモ第六百七十三條ノ場合ニ於テハ之ヲ許サズ格言ニ曰ク利益ナケレハ訴權ナシト即チ他ノ利害關係人ノ權利即チ

利益ハ他ノ利害關係人自ラ其痛苦ヲ感ス可ク之ヲ主張スルモノニ於テ何等ノ利害アラサレハナリ
以上ニ揭示シタル場合ニ適合シタル異義ノ申立テナルキハ裁判所ハ之ヲ以テ正當ノ異義ト認メ競落ヲ許サス而シテ其處分法ハ左ノ如シ第六百七十二條第一號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ一アルキハ職權ヲ以テモ競落ヲ許サス但シ

(ウ)第一號ノ場合ニ於テハ競賣シタル不動産ヲ讓渡スルヲ得サルモノナルキ又ハ競賣手續ノ停止ヲ爲シタルキニ限り

(ろ)第二號ノ場合ニ於テハ能力若クハ資格ノ欠缺ヲ除去セラレサルキニ限り

(ハ)第三號ノ場合ニ於テハ利害關係人手續ノ續行ニ付キ承認セサルキニ限り

之ヲ要スルニ裁判所ハ異義ノ申立ノ正當ナルト否トニ拘ハラズ異義ノ申立ヲ受ケタルキハ兎ニ角競落ヲ許シ又ハ許ササル決定ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス而シテ競落ヲ許ス決定ニハ左ノ條件ヲ掲載セサル可カラズ

(一)競賣ヲ爲シタル不動産

(二)競落人及ヒ競落ヲ許シタル競賣價格

(三)特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルキハ其條件右決定ハ之ヲ言渡ス外尙ホ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ公告ス可キモノトス

然リ而シテ右競落許否ノ決定ニ對シ左ノ者ハ即時抗告ヲ

爲スヲ得即チ

(一)利害關係人ハ競落ノ許否ニ付テノ決定ニ因リ損失ヲ被ムル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スヲ得

(二)競落ヲ許ス可キ理由ナキヲ又ハ決定ニ掲ケタル以下ノ條件ヲ許ス可キヲ主張スル競落人モ亦即時抗告ヲ爲スヲ得

(三)競落ヲ求メ之ヲ許ス可キヲ主張スル競買人モ亦即時抗告ヲ爲スヲ得

但シ此場合ニ於テ競落ヲ求メタル競買人ハ其申出テタル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス

今即時抗告ヲ爲スニ競落ヲ許ス決定ト許サ、ル決定トニ

付キ其原由ヲ異ニス

競落ヲ許シタル決定ニ對スル抗告ハ左ノ二箇ノ内必ス一ノ理由アルヲ要ス

(一)此法律ニ掲ケル競落ノ許可ニ對スル異義ノ原因ノ一ヲ理由トスルキ

(二)又ハ競落決定カ競落期日ノ調書ノ旨趣ニ抵觸シタルヲ理由トスルキ

競落ヲ許サ、ル決定ニ對スル抗告ハ左ノ理由ヲ要ス
此法律ニ掲ケル總テノ不許ノ原因ナキヲ理由トスルキ

然レモ取消ノ訴若シハ原狀回復ノ訴ノ要件ヲ理由トスル抗告ハ此規定ニ依リ妨ケラル、ト無キハ勿論ナリ

抗告裁判所ハ審理上必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲
 サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定メ以テ攻撃辨護ヲ充分
 ニ盡サシムル者トス而シテ一ノ決定ニ關スル數個ノ抗告ハ
 之ヲ併合ノ同時ニ審判ス而シテ又第六百七十三條及第六百
 七十四條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用スル者トス
 以上ノ審理手續ニ因テ執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢
 棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所ノ揭示板ニ揭示
 シテ公告スルモノトス
 右抗告裁判所ノ確定判決ニ因リ各抗告人ガ其判決ニ付キ
 如何ナル位地ニ立ツ可キヤ即チ法律ノ之ヲ規定スルコト左
 ノ如シ

第一競落ヲ許ス決定

右ノ決定ニ於テハ競落人ハ不動産ノ所有權ヲ取得スル
 モノトス

然レモ競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非サレハ不
 動産ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ス而シテ其中間ニ於テ競落人
 若シハ債權者ハ各自ノ希望ニ因リ競落品引渡アルマテ管
 理人ヲシテ不動産ヲ管理セシメシムルコトヲ申請シタルモ裁
 判所ハ管理人ヲ命ジ之ヲ保管セシムル又債務者ガ引渡ヲ拒
 ミタルモハ競落人若シハ債務者ノ申立ニ因リ裁判所ハ執
 達更ニシテ債權者ノ占有ヲ解キ其不動産ヲ管理人ニ引渡
 サシム可キモノトス

第二競落ヲ許サル決定

(一)此ノ決定確定シタルモハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル

競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カル

(二)第六百七十八條(競賣期日ト競落期日トノ間ニ天災其
他ノ事變ニ因リ不動産カ著シク毀損シタルトキハ最
高價競買人タル呼上ヲ受タル者ハ其競買ヲ取消ス權
利アリ其毀損ノ著シキヤ否ヤハ裁判所事情ヲ斟酌シ
テ之レヲ定ム)ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許
サ、ルキハ第六百五十五條乃至第六百五十七條ノ規
定ヲ準用ス

茲ニ讀者ノ注意ス可キ二個ノ點アリ即チ一ハ數個ノ不動
産ヲ競賣ニ付シタル場合ニ於テ或ル不動産ノ賣得金ノミ
チ以テ右債權者ニ辨濟ヲ爲シ且強制執行ノ費用ヲ償フニ
足ル可キキハ他ノ競賣ニ付セラレタル不動産ハ如何ニ處

分ス可キヤノ疑問ト一ハ競落人カ代金支拂期日ニ其義務
ヲ完全ニ履行セサルキハ競賣ニ付シタル不動産ヲ如何ニ
處置ス可キヤノ疑問是ナリ第一ノ點ハ抑モ不動産ヲ競賣
ニ付スル目的ハ債權ヲ満足セシムルト及ヒ之ニ附帶スル
強制執行ノ費用ヲ償フ爲メニ之ヲ爲スモノニ過キス夫レ
然リ今既ニ一個ノ不動産ヲ以テ斯ノ目的ヲ充分ニ達シ得
タリトセハ競賣ニ附スル所以ノ目的ハ既ニ消滅セリ將タ
何チ苦シテ他ノ不動産ヲ競賣ニ附ス可キノ理アラシヤ故
ニ斯ル場合ニ於テ其競賣ニ附セラレタル不動産中ノ如何
ナル不動産ニテモ前ノ目的ヲ達シ得ラルハニ於テ差支ナ
キ不動産ナレハ何ノ不動産ニテモ可ナルチ以テ債務者ハ
其不動産中此不動産ヲ賣却アリタシト指定スルノ權利ヲ

有テ是レ固ヨリ當然ノコトニシテ余ノ喋々ヲ要セサルナリ
第二ノ點ハ債務者ノ不動産ヲ法律ガ無遠慮ニモ其競賣ヲ
強行セシムル所以ハ其競賣代金ヲ以テ債權者ノ權利ヲ滿
足セシメントスルニ在リ然ルニ今之レガ競賣ニ附シタル
モノニシテ其代金ヲ得スノハ競賣ノ競賣タル所以ノ精神
安クニカ在ル故ニ斯ル場合ニ於テハ裁判所ハ職權ヲ以テ
不動産ノ再競賣ヲ命スルモノナリ是又至當ノ制度ト云フ
可シ而シテ再競賣ノ性質及ヒ効用ハ左ノ如シ

(一)最初ノ競賣ノ爲ニ定メタル最低競賣價額其他賣却條
件ハ再競賣ノ手續ニモ亦之ヲ適用ス

(二)再期競賣日ハ少ナクトモ十四日ノ後タルコトヲ要ス

(三)競落人カ再競賣期日ノ三日前ニ買入代金及ヒ手續ノ

費用ヲ支拂タルトハ再競賣手續ヲ取消スモノトス

(四)再賣ヲ爲スルハ前ノ競落人ハ競賣ニ加ハルコトヲ許サ
ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キハ
不足ノ額及ヒ手續ノ費用ヲ負擔シ其高キハ剩餘ノ
額ヲ請求スルコトヲ得ス

以下競賣ノ代金支拂及ヒ其配當ヲ論セン
代金ノ支拂及ヒ配當ハ競落ヲ許ス決定ノ確定後ニ裁判所
カ職權ヲ以テ定ムル期日ニ於テ之ヲ爲ス而シテ該期日ニ
於テハ先ツ配當ス可キ不動産ノ賣却代金ノ幾許ナルヤヲ
定メサル可ラス賣却代金トハ左ノ二者ヲ包蓄ス

第一代金

第二不動産カ果實其他金錢ニ見積ルコトヲ得ヘキ利益ヲ

生スル場合ニ於テハ競落決定言渡ヨリ代金支拂マテノ利息

但代金支拂ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可キ者トス又最高價競買價額ノ保證ノ爲メ預リタル金額ハ代金ニ之ヲ算入ス」茲ニ於テ裁判所ハ配當表ヲ調製シ以テ配當實施ノ準備ヲ爲ス而シテ右配當表ニ關シ裁判所ノ爲ス可キ手續左ノ如シ」

(一)裁判所ハ呼出ニ對シ出頭シタル利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ヲ訊問シテ配當表ヲ確定ス

(二)配當表ニハ賣却代金各債權者ノ債權ノ元金利息費用及ヒ配當ノ順位並ニ配當ノ割合ヲ記載ス可キ者トス」

(三)若シ出頭シタル總テノ利害關係人及ヒ執行力アル正

本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者一致シタルトハ其一致ニ基キ配當表ヲ作ル可キモノトス而シテ右配當ニ對シ各債權者及ヒ債務者ハ異義ヲ申立ツル權利ヲ有ス即チ左ノ如シ

(一)期日ニ出頭シタル債務者ハ各債權者ノ債權ニ對シ又ハ其債權者ノ爲メ主張スル順位ニ對シ異義ヲ申立ツル權利アリ但シ執行スルヲ得ヘキ債權ニ對スル債務者ノ異義ハ第五百四十五條第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ完結ス

(二)出頭シタル各債權者ハ自己ノ利害ニ關シテハ他ノ債權者ニ對シ前項ト同一ノ權利アリ

(三)競落人ハ賣却條件ニ因リ不動産ノ負擔ヲ引受クル外

配當表ノ實施ニ際シ買入代金ノ支拂ニ換ヘ債務ヲ引受クルコトヲ得若シ債務者競落人ナルキハ其債權ノ配當額ガ買入代金ノ額ニ滿ツル限りハ買入代金トシテ之ヲ計算スルニ因リテ消滅スト雖モ若シ引受ク可キ債務又ハ計算スヘキ競落人ノ債權ニ對シ適當ナル異義アルキハ之ニ相當スル代金ヲ支拂ヒ又ハ保證ヲ立ツ可キモノトス

其他配當表ニ對スル異義ノ完結及ヒ配當表ノ實施ニ付テハ第六百三十條以下ノ規定ヲ準用スルモノトス又數多ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲ス可キ不動産ノ競賣手續モ前述ノ競賣手續方法ニ據テ之ヲ處分ス
前陳ノ強制競買ニ付キ利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ裁判

所職權者以テ競賣期日ノ公告前ニハ入札方法ヲ以テ競賣照換管照之差處分スルコトヲ得乃チ其手續及ヒ其制裁ハ左ノ如シ
憑據

(一) 憑據管照之期日ニ於テ執達吏ニ之ヲ差出スモノトス
但シ其種ヒハ茲附諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

(二) 又執達吏ノ姓名及ヒ其住所

(三) 不動産其表章ノ人其人

(四) 其私價額ヨリ算出スルモノトス

(五) 執達吏ハ其札人ヲ面前ニ於テ必ス入札ヲ開封シ且之ヲ朗讀セサル可ラス

(六) 證人以上同價額ヲ凡札附諸件未執達吏ハ其者ヲシテ
(七) 追加ノ入札ヲ爲シ及ヒ其競賣價夫札人ヲ定ム

(四)一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表セシテ他ノ入札價額ニ對スル比例ヲ以テ價額ヲ表シタル入札ハ之ヲ許サス

(五)最高價入札人タル呼上ヲ受ケタル者第六百六十四條

ノ規定ニ從ヒ保證ヲ立ツ可キ求ヲ受クルモ之ヲ立テ

サルキハ其次位ノ入札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム

(六)(五)ノ場合ニ於テハ最初呼上ヲ受ケタル者ハ其入札價

額ト次位ノ入札價額トノ差金ヲ負擔スル義務アリ

以下強制管理ノ部ニ移ラシ

強制管理

強制管理ハ新法典ノ創造ニ係ル穩當ノ強制執行ニシテ即チ債務者が不動産ノ取得ヲ獲得シ以テ漸次ニ其債務ヲ果

サシムル良制裁ニシテ乃チ世襲財産ニ對シテハ最モ此法ノ必要ヲ感ルモノナリ而シテ普通財産ノ強制執行ニ付テハ強制管理強制競賣二者同時ニ之ヲ執行スルモ又タ其一ヲ撰フモ債權者ノ自由權内ニ在リト雖モ國家ノ希望スル所ハ力所及此ノ穩當手段ニ在リ

強制管理ノ性質効用ハ第七百七條ニ之ヲ規定セリ即チ左ノ如シ

裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於テ債務者カ管理人ノ事務ニ干渉スルヲ及ヒ不動産ノ收益ニ付キ處分スルヲ禁シ又不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルキハ其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キヲ命ス可シ

斷ニ収獲シ若クハ収獲ス可ク又ハ期限ノ到來シ若クハ
 到來ニ至テ果實ヲ收益ニ屬ス
 開始決定ニ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ因リ其効
 力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス
 乃チ第一項ハ強制管理ノ性質ヲ指シ第二項ハ其効用ノ及
 フ所ノ範圍ヲ示シ而シテ第三項ハ其効力ノ生スル期間ヲ
 定メラレタリ更ニ之ヲ詳説セムニ第一項即チ強制管理ノ
 性質ヲ解セハ左ノ如シ
 第一強制管理ニ附セラレタル不動産ハ其收益ヲ目的ト
 スルコ
 第二之ガ管理人ハ裁判所ノ任命ニ係ル管理人タルコト
 要ス

第三管理人ガ爲ス所ノ不動産收益及ヒ其處分ニ付債務
 者之ニ干渉スル能ハサルコ
 彼ノ不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルキハ其第
 三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キコトヲ命ス可シト規
 定シタル者ハ唯其第三者タルガ故ニ特ニ注意セラレタル
 迄ニシテ以上ノ性質ノ範圍外ニ涉ルモノニ非サルナリ何
 トナレハ其給付ハ當然收益上ノ一分子ナレバナリ第二項
 ハ即チ收益上ノ區域ノ廣狹ニ係レリ即チ強制競賣ノ場合
 ニ於テハ必ス現存セル果實ヲラサル可ラスト雖モ強制管
 理ハ其目的漸次ニ收益ヲ取得スルニ在ルヲ以テ將來収獲
 ス可ク又ハ到來ス可キ果實モ收益ニ屬スルモノト規定セ
 シ所以ナリ

余ハ次キニ強制管理ノ解除ヲ查察シ以テ其創造ニ對照セムトス

第一各債權者ハ不動産ノ收益ヲ以テ辨濟ヲ受ケタルハ強制管理茲ニ解除ス

第二若シ又管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルハ債權者其義務ヲ果サ、ルキハ強制管理茲ニ解除ス

強制管理ガ最終ノ目的ハ第一ノ解除ヲ得ンガ爲メ發生シタル強制執行ナレハ此ノ目的ニシテ達シ得ラレナハ強制

管理ハ茲ニ消滅シ從テ管理人ノ責任モ亦茲ニ消滅スルハ勿論ナリ夫レ然リ而シテ管理人ガ此目的ヲ達セン爲メ其

授受セラレタル權利義務ノ如何ヲ左ニ吟味ス可シ
(一)管理人ハ管理及ヒ收益ノ爲メ自ラ不動産ヲ占有スル

權ヲ有ス此場合ニ於テ抵抗ヲ受クルキハ執達吏ヲシテ立會ハシムルヲ得

(二)管理人ハ任命ハ債務者ニ代リ第三者ノ給付ス可キ收益ヲ取立ツル權ヲ授與スルモノトス

抑モ管理人 債權者ノ代理人ニアラス又債務者ノ代理人ニモアラスシテ實ニ強制管理ノ代理人ナリ而シテ法律ガ

其不動産ニ對シ占有權ヲ授與スル所以ノモノハ管理人ニシテ此資格ナシトセハ一ニ債務者ノ資格ヲ以テ其占有ニ

對シ事ヲ行ハサル可ラサルノ不便アレバナリ又第二ニ至リ第三者ノ給付ス可キ收益ヲ取立ル權ナシトセハ其都度

債務者ノ代理人タル資格ヲ帶ヒサル可ラス如此ナレバ事務ヲ斡旋處置スルニ每ニ不便ヲ感スルノミナラス債務者

ニ制裁ヲ下ス所以ノ道寛慢ニシテ大ニ強制管理ヲ創設セシ精神ニ背戻スレハナリ何トナレハ強制管理ハ其不動産ノ權利ノ下ヨリ債務者ヲ左遷シ一切事ニ預カラシメサルヲ本旨トスレバナリ

(三) 管理人ハ直チニ不動産ニ付キ得タル収益ヨリ其不動産ノ負擔ニ係ル租税其他ノ公課ヲ控除シタル後別段ノ手續ヲ要セスシテ管理ノ費用ヲ辨濟シ其殘額ノ配當ニ付キ債權者間ニ協議調ハサルキハ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可キモノトス

(四) 前項ノ届出アリタルキハ裁判所ハ第六百九十一條第六百九十六條乃至第六百九十八條ノ規定ヲ準用シテ配當表ヲ作り其配當表ニ基キ管理人ヲシテ債權者ニ

支拂ヲ爲サシム可キモノトス

(五) 管理人ハ毎年及ヒ其業務施行ノ終了後各債權者債務者及ヒ裁判所ニ計算書ヲ差出ス可キモノトス

(六) 其他管理人ハ總テ裁判所ノ監督ノ下ニ立チ其指揮ヲ遵奉シ以テ業務施行ヲ爲ス可キモノトス若シ疎愚懈怠其他違背ノ所爲アルキハ或ハ保證又ハ廿圓以下ノ罰金ニ處セラレ若シハ其職ヲ免セラル、モノトス

(五)ノ場合ニ於テ異義ノ申立ヲ爲スキハ左ノ規定ニ據ル可キモノトス

(イ) 各債權者及ヒ債務者ハ計算書ノ送達アリタルヨリ七日ノ期間内ニ執行裁判所ニ異義ノ申立ヲ爲スヲ得
(ろ) 右期間内ニ異義ノ申立ナキキハ計算書ニ付キ全ク異

義ナク且管理人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス

(は)異義ノ申立アルキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊シタル後
之ヲ裁判ス可シ若シ異義ノ申立ナク又ハ申立テタル
異義ヲ完結シタルトキハ裁判所ハ管理人ヲシテ卸任
セシム可キモノトス

終ニ臨ンテ一言ス可シ即チ強制管理ニ付テハ第六百四十
二條第六百四十三條第六百四十四條第一號第三號及ヒ第
六百五十一條乃至第六百五十四條ノ規定ヲ準用ス又不動
産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合
ニ於テハ第六百四十三條第一號第二號ニ依リ提出ス可キ
證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルヲ疎明スル證書ヲ以
テ足ル又強制管理開始ノ決定ヲ爲シタルキハ更ニ強制管

理ノ申立アルモ開始決定ヲ許サ、ル如キ總テ強制競買ト
同一ノ規定ニ從フモノトス

以下船舶ニ關スル規定ニ移ラン
船舶ニ對スル強制執行

船舶ハ如何ナル財産ナルカ動産不動産何レノ部分ニモ入
ラサルカ何ソ其レ然ラン船舶ハ其物件ヲ彼處ヨリ此處ニ
運轉移動スルヲ得ルモノナルカ故ニ儼然タル一ノ動産
ナリ然ラハ即チ之ヲ動産強制執行ノ部分ニ於テ之ヲ規定
ス可キヲ當然ナリトスレモ國家ハ商運ノ圓滑ヲ保護スル
精神ニ據リ特ニ船舶ニ限り不動産強制執行ニ關スル規定
ヲ準用シテ特別ノ取扱ヲナセリ然レモ茲ニ注意ス可キハ
其特別保護即チ不動産ノ強制競賣ノ規定ヲ準用ス可キ船